



目次

勝田美津子さん証言（14歳、女学校2年生、旧千葉県夷隅郡東海村）	176
諸岡政二さん証言（5歳、旧千葉県長生郡一松村）	178
高森十四男さん証言（17歳、養成工、旧印旛郡白井村）	179
匿名（Sさん）証言（10歳、国民学校5年生、旧市原郡富山村）	183
b. 東京（11人）	185
加藤季徳さん証言（当時？歳、鉄道省勤務）	185
浜中ひろ子さん証言（9歳、小学校5年生、東京葛飾）	185
杉本敏子さん証言（14歳、軍需会社東京本店会社員、千葉県柏市）	189
石塚節子さん証言（6歳、東京都台東区浅草竜泉寺町）	193
小島とよ子さん証言（27歳、軍需工場動員扱い、旧東京都杉並区松ノ木町）	197
門間香津子さん証言（9歳、市川市中山国民学校3年生、当時千葉県市川市）	199
古家（こいえ）幾久江さん証言（12歳、国民学校6年生、山梨県疎開）	201
熊谷富美子さん証言（14歳、高等女学校3年生、東京都豊島区）	204
小林多喜子さん証言（9歳、芳林国民小学校3年生、東京都文京区神田）	208
田中洋子さん証言（5歳、東京都北区赤羽）	210
榎本和助さん証言（18歳、国鉄職員、東京都中野区）	212

勝田美津子さん証言（14歳、女学校2年生、旧千葉県夷隅郡東海村）

終戦時は、家族で旧千葉県夷隅郡東海村（現在は、いすみ市大原）に疎開していた。家族構成は両親と私の3人である。千葉県に疎開する前には、横浜市中区伊勢崎町にいた。母は継母である。実母は、私が6歳の時に亡くなった。継母は、私のために子どもを作らなかったと言っていた。

1941年12月8日、小学校4年生の時、日本海軍による真珠湾攻撃に始まる「大東亜戦争」が本格化した。私は小学生の友達と二人で近所の神社に行って「どうか日本が戦争に勝てますように」と何度もお願いした。街に出ると、女性がデパートの前で「千人針」の訴えがあると協力していた。これは出征兵士が無事であるように願う希望である。千人が白い腹巻きに赤い糸をひと針ずつ縫うもので、多くの人に支えられた行為であるが、また時間を要する仕事であった。ある日、父と宮城に行った。父は二重橋を前にして、砂利の上に正座をして頭をひれ伏した。私は、なぜ父がそこまでするのか理解できなかった。私は父の後ろに立って足で砂利を蹴った。

1945年5月、横浜市中区伊勢崎町にあった私の家は、空襲時に何か重要な建物に類焼を防ぐために凡そ10軒の民家と共に強制疎開をさせられた。大切な家具やグランドピアノも引っ越しできず、その場で破壊された。その補償の有無は知らない。私は、その時、私立の横浜共立学院の2年生であった。躰の厳しい学校だった。父は、鞆を扱う貿易商であったから、戦争が開始されると仕事はできなくなった。少しの貯えと実家の米を扱って生活していた。戦争前はアメリカ人等外国人も家によく出入りをしていた。父は、農業学校出身であったが、横浜で事業と英語を独学で学んでいた。父は、終戦時40歳であったが、出征はしなかった。

横浜にいた頃、艦載機による機銃掃射があった。逃げ遅れた中年の女性が腹部に血を流して倒れていた。大人は「内臓が出ている」と言ったので、私は、初めて見る空襲犠牲者に関心があったが、大人から「見ちゃいかん」と制止された。おそらく、背後から機銃が貫いたと思う。3月10日の東京大空襲は横浜からよく見えた。煤塵が飛来した。

5月に旧夷隅郡東海村にきて、大原女学校に転校した時、校長は「これまでは私立であったが、今度は県立女学校に編入出来ることはありがたいと思いなさい」と言われてびっくりした。この校長は、横浜の私立の水準を低いと思っていたのである。私は、一言、抗議をしようかと思ったが、理解出来ないような人には無駄だと思った。当時の初等教育制度は、小学校を卒業して働く者が多

かったが、その後高等科へ、女学校へ、中学校（男子のみ）へ進学した。学校には、年に天長節（4月29日は昭和天皇の誕生日、現在みどりの日になっている）等の行事が何回かあった。そのたびに、講堂舞台上で校長が恭しく、教育勅語の巻物を広げながら読み上げるが、同時に、壇上のご真影（天皇と皇后の写真）のカバーがするすると開けられる。しかし、この時、職員も生徒も頭をあげてはならないことになっている。私は好奇心が強かったので、頭をひょいと持ちあげた時、全員が頭を下げており、異常さを感じた。先生も私の行為を目撃していないので、注意をされることもなかった。教育勅語とご真影の保管こそが校長の重大な任務であったらしい。

ここで友達ができた。旧家の娘であった。いつも一緒に遊んだ。特に季節柄、海で遊んだ。日在海岸と一宮海岸の中間にあたる東浪見（とらみ）海岸が遊び場である。海で泳いでいると、警戒警報の音は聞こえないが、水平線の向こうから突然、艦載機が5機位の編隊で極めて低空飛行で現れる。私達は、パイロットに見つからないように水中に潜って、艦載機が頭上を通過するのを待っている。すると、機銃弾が海面に衝突して、速度を落として水中に落下して行くのが見えた。頭上を通過する機影は灰色であった。爆音は恐ろしかった。パイロットの顔を見る余裕はなかった。この艦載機は村を通過して、東京や横浜に行ったと思う。村では被害がなかった。

村には隣組共同の防空壕があった。壕は3畳の広さであった。防空壕は簡易なもので、爆弾に耐えるものでなく、機銃掃射から身を守るためのカモフラージュ程度であった。終戦間際になると、艦載機は日中、一日おきに来襲してきた。路上で艦載機が来ると私は伏せるが、友達が落ち葉を私の背中に被せてくれた。その時、彼女の心臓の音が聞こえ、熱いものを感じた。その後、彼女自身も伏せた。

後日、聞いた話では、一宮海岸からアメリカ本土に向けて風船爆弾を飛ばしたそうであるが、届いたのは1個だったそうである。私の女学校では2年先輩が、落下傘製造工場へ勤労働員があったが、私の学年では動員はなかった。海岸で高さ15m位の櫓を組んで、一宮海岸に穴をあけている作業を見つけた。大人の話では、海岸の砂鉄を利用しようとしたらしい。

1945年8月15日は晴れて暑い日だった。重大放送を聞くために、ラジオを真ん中に置いて大人たちが正座をして、頭をひれ伏していた。私は立って聞いていたが、戦争が終わったことは理解できた。これで、艦載機に脅かされずに海で遊べると嬉しくなって、赤い水着を持って浜に飛んで行った。その後、大人が何と感じていたのか分からない。父親も黙っていた。母も何も言わなかった。母は天皇のことより、私の方が大事であったと思う。

戦後、父は再び貿易商はやめてしまった。1949年、交通事故で亡くなった。

それから、継母と私の二人きりになった。継母は私を本当に大事に育ててくれたので感謝している。

戦争は 2 度としてならない。戦争でみんなが不幸になる。人が死ぬ。どうして平和憲法 9 条を変えようとするのか。憲法 9 条の中身を知らない人がいる。戦争を知らない人たちに戦争の恐ろしさを知らせなければならない。

諸岡政二さん証言（5 歳、旧千葉県長生郡一松村）

終戦当時、私は 5 歳であった。旧千葉県長生郡一松村は現在長生村で生まれた。家族構成は祖父母、両親、兄、姉二人、私、弟の 9 人家族であった。家業は小作人の農業であった。家が村で最も貧しい家だと言われていた。家の周囲は水田と沼地であった。沼には鰻がいて、父は農業の傍ら、鰻を自ら取り、近所の人からも買い付け市場に出していた。おかげで、子どもが多い家族であったが、子どもらの学用品が購入できた。戦中、戦後米は統制で供出されるので、農業をしても米は容易には食べられなかった。戦争と小作制度の二重の統制があったからである。私の学校の弁当は芋であったが、地主の子どもは白米の弁当であった。

小学校入学前の 5 歳の私が記憶している戦争は次の話である。この話は、若い人たちに戦争の体験としてよく語る内容でもある。

第 1 に、叔父が出征して南方に派遣されたが、マラリヤで戦病死した。叔父はまだ独身であった。叔父が出征する日、村中の人が入積駅まで見送った。私は 4 歳だったので、駅まで行けなかった。叔父の位牌は私の家にあった。しばらく、軍帽の叔父の遺影が部屋に飾ってあった。

第 2 に、家から約 1km 先に一松小学校があった。そこへ、艦載機が機銃掃射を加えた。艦載機は通常、編隊を組まずに単独で奇襲していた。空襲後、家の庭や水田の畦道に機銃の薬莢が落ちていた。それを拾って家に持って帰った。祖父は、米軍は学校に日本軍が潜んでいると思って攻撃していると説明した。小学校の校舎は平屋で長い建物であった。事実は、学校に日本軍はいなかった。

第 3 に、1945 年 5 月頃、家の前にある沼の蒲の穂の高さぐらいの超低空を艦載機が飛来した。そのパイロットの横顔が見えた。飛行帽の搭乗員は赤ら顔で、大人が言っているように「赤鬼」に見えた。

第 4 に、1945 年 7 月頃、B29 の約 20 機編隊が南から東京方面に向かって高高度を飛行していた。そこへ、日本軍の戦闘機 2 機が迎撃するために、B29 に接近を図っていた。突然、B29 の機銃が火を噴いて、2 機の戦闘機は黒煙を吐きながら、弧を描いて墜落して行った。私は、気になったので、祖母に現場に行こ

うと言ったが、祖母は、墜落地点は遠いから行けないと言いながら、墜落地点に向かって涙を流して合掌した。この悲しい場面は忘れられない。

終戦間際に、アメリカ軍が九十九里に上陸すると噂された。実際、だれの命令か知らないが、竹やりを用意させられた。子供心であるが、こんなことで戦争にかなわないと疑問を感じた。しかし、大人はそんなことを言わなかった。防空壕は、初め家の前に作ったが、米軍に場所が発見される恐れがあった。そこで、家の裏にある魚のコンクリート製の養殖槽（深さ 1m）にたまたま水がなかったのので、上に板を渡し、上に土を被せて防空壕を構築した。その裏は竹林で場所がカモフラージュできた。艦載機が飛来すると時々、防空壕に避難した。もう 1 人の叔父は東京で洋服屋の見習いをしていて、東京大空襲を体験していた。東京大空襲後、叔父は千葉の臨海部にある日立航空機軍需工場に動員されていた。1945 年 6 月 10 日、出勤日の早朝、千葉市蘇我 1 丁目の住宅地が日立航空機を攻撃目標にしていた B29 編隊の誤爆で多くの住民が死んだが、蘇我駅で下車する予定であった叔父は「俺は命拾いした。」と言っていた。

一松村の小作人の家にはラジオがなかった。私が終戦を知ったのは、戦後父が「戦争は終わった」と話してくれたからである。

戦後、約半年後に二人の米兵が小銃で武装したまま我が家にやってきた。畦道にジープは走れないから、途中で下車したらしい。父は不在だった。母が対応した。米兵は omizu、omizu と日本語で話した。母は井戸から水を汲んで差し出したら、米兵は、「これは飲めない」という仕草をして、arigatou と言って戻っていった。このあたりの水は鉄分が多く茶色に着色していたので、米兵は忌避したと思う。二人の若い米兵を観察していた私は、「米兵はやさしい人だ、赤鬼ではない」と結論付けた。

戦後、叔父から洋服屋の技術を学び、長い間、京成千葉中央駅付近の洋服店で働き、今は定年になり千葉市中央区の自宅で洋服の内職を平和の中で営んでいる。

私は、自分が成長する過程で日本が戦争に負けてよかったと思うようになった。もし、日本が戦争に勝てば、今頃軍部が幅を利かせていただろうと思うからである。戦争は 2 度と繰り返してはならない。

高森十四男さん証言（17 歳、養成工、旧印旛郡白井村）

私は、印旛郡白井村の理髪店の 3 男として 1927 年 10 月に生まれた。戦争中の家族構成は、両親、長兄、次兄、私と妹の 6 人家族である。戦時中は、男が 3 人もいたが、いずれも戦争に関係しないでいることは親として肩身の狭い思い

であったらしい。やがて、二人の兄が戦地に行ったので、両親は近所の人に自慢げに話していた。7歳年上の長兄は、親の家業理髪店を継ぐはずであったが、軍属として南方ラバウル島に派遣された。当時、同島に海軍山本五十六元帥が駐在していた。長兄は、山本五十六も含めて、軍人の理髪を担当していた。兄は山本五十六が撃墜される飛行機の出発を見送ったそうである。5歳年上の次兄は、陸軍少年飛行兵を志願して、九州からフィリピンに派遣された。フィリピンのアメリカ軍捕虜収容所における日本軍の捕虜に対する扱いが人道的ではなかった。負傷した米兵捕虜が、**water, water** と水を求め、日本語を覚えると **mizu, mizu** と水を求めたが、捕虜担当の兵隊は「ふざけるな、この野郎」と言って、往復ビンタをしていた。このような日常的なできごとを現地人の看護婦は一部始終見ていた。1945年に敗戦が濃くなって、捕虜に対する虐待が明るみに出ると、連合軍の軍事裁判で有罪になることを恐れて、次兄の属していたグループは上官を先頭に単独飛行機で日本に帰った。次兄は終戦を九州で迎えた。

1942年3月、私は、印旛郡白井尋常小学校高等科を卒業した。卒業しても、自由がなかった。学校に割り当てがあり、卒業生も勤労働員に振り向けられた。生徒や卒業生の中にも割り当てに指名されないことは恥ずかしいと思わされていた。1942年4月から、船橋にある日本建鉄の軍需工場に配属になった。同年齢の養成工は全国から約200人来ていた。寮は数棟あった。5人組の相部屋の寮生活が求められた。3食は、芋、米少しの麦飯、さいころ大の芋と少しの米を煮たもので、これはさいころ大に芋米粒がついていると言う代物である。肉はなかったが、船橋漁港で水揚げされる、イワシやアサリは食べられた。生活は軍隊生活と同じであった。朝は6時に「起床！」の号令がかかる。すばやく、夜具を整理して、服装を整えて部屋の外に整列をしなければならない。整列が遅れる人はいつも同じ人だった。最後の2-3人が寮長にビンタをされた。また、整列させておいて、後方の夜具を点検して、夜具がきちんと整理されていないと、ビンタになった。整列が遅れないように、起床前に布団のなかで制服を着ている人も見つかるビンタであった。ビンタをするのは寮長や予備役配属将校であった。

工場には、大人の徴用工も50人位働いていた。彼らは平和産業に従事していたが、若くないので兵役に適さないが、労働力になるので徴用されていた。大人と同じ班にいた。工作中、大人は子どもの私たちをかばってくれた。私は、千葉市亥鼻の中島さんに親しくしてもらって、彼が日曜日の非番に彼の家に遊びに来るよう誘ってくれた。同僚と誘い合って、日曜日中島さんの家（中島布団店）を訪問して、お茶をご馳走になった。うれしかった。（戦後、私が千葉市に洋服店の住み込み店員となった時も中島さんに挨拶に伺った。）また、工場には、1割に満たないが、私と同じ若い朝鮮人、台湾人が勤労働員されていた。私

は、植民地の人を差別しなかったので、親しくなった。朝鮮人は朴コウユウと名乗った。私に朝鮮語を教えてくれた。台湾人は強制的に日本に連れてこられたと不満を述べていた。彼は足の指が6本もあって、隠していたが、足袋を買わないといけないので、「秘密」も話してくれた。工場では作業服は支給されたが、下着や靴、ゲートル、足袋類は自ら購入しなければならない。冬は工場内も寒かった。

私たちの身分は6ヶ月の研修中は8時間労働制であったが、研修が終わると養成工になり、労働時間は朝8時から夜7時まで働いた。残業には手当ても支給されたので、小遣い欲しさに残業した。5人相部屋であるので1人だけで、部屋に戻っても寂しかったこともある。月10円程度の給料が支払われた。それで、歯磨き、手紙などの生活用品を購入した。いつも空腹なので、間食を買って食べるが多かった。風呂は3-4日に1回用意された。下着は自分で洗濯をする等待遇は、刑務所と同じ様だった。

労働の中身は、戦闘爆撃機の翼の製造であった。私の班は、補助翼の仕上がり検査であった。検査は翼の板金を鋸がしっかり締めているかどうかである。鋸が曲がっている物は不良品、いわゆるオシャカである。丁寧に検査をすれば、補助翼が作業台に積まれて来る。検査を厳しくすると、組み立て班から「このやろう。生意気だ」とやられるので、苦労した。工場に私服の憲兵が監視にあっていた。仲間が「憲兵がくるぞ」と合図をすると、養成工や徴用工はわき目を振らずに仕事をした。サボっていることをチェックされた養成工は、北海道の炭鉱に飛ばされたと言う密かな情報が流れた。

1944年頃から、私は艦載機による空襲をほぼ毎日のように体験した。グラマン等の艦載機の大編隊が船橋市上空に出現するや否や、市内の各方向に分かれて機銃掃射を始めた。アメリカのやり方は気まぐれの遊びのような機銃掃射であった。低空を飛行する艦載機の操縦士の顔が見えた。あざけるような表情に見えた。艦載機は船橋市夏見方面から海神を通過して工場を攻撃した。工場には、15人程度収容の防空壕が掘られていた。ある日の空襲で、防空壕までたどり着いた養成工が後ろから撃ちぬかれて死んだ。会社で葬儀をしたように思われない。艦載機は攻撃目標には執拗にトンボ返り旋回して、10-20分ぐらい波状攻撃を繰り返した。高圧線の下をくぐって来た艦載機が私に迫って来た時、私は松林の中で、松の木にかじりついて動けなかった。怖かった。1945年7月7日、甲府に続いて、千葉市が焼夷弾による大空襲を受けたが、その後、船橋市で米軍は上空から宣伝ビラを散布した。地元の警防団や町内会役員は必死になって「敵のチラシを拾ってはならん！」と警告した。「この次は船橋、市川だ！」という内容のチラシだった。そのうち終戦となった。結局、船橋の軍需工場には爆弾攻撃も焼夷弾攻撃もなかった。船橋行田の無線局には高射砲が1基据え

付けられていたが、高射砲は B29 には届かなかっただけでなく、応戦発砲すれば、米軍に高射砲陣地の場所を教え、高射砲が破壊される恐れからいつも沈黙していた。

1945年8月15日の重大放送は全員待機するように言われていたが、「どうせ、天皇が団結して戦うように訴えるだけだろう」と想定して、仲間と夜食用のイモを掘りに行っていた。帰ってみると「日本は戦争に負けた」と告げられた。子ども心ながら、虚脱状態になった。2日後、仲間と宮城に行って、「戦争に負けて天皇に悲しい思いをさせて申し訳ない」との思いを伝える行動に出た。宮城に着いてみると、すでに何百人の男女の大人が砂利の上で正座をして、泣いているのである。私はびっくりして千葉に帰った。私は8月末まで工場にいたが、人員整理されて、約90円の退職金を懐に入れて田舎に帰った。

次兄は九州から戻っていたが、長兄は1947年に帰国した。田舎に帰って問題になったのは食糧が足りないことだった。子どもが米粒を落とすと親がそれを食べるので、親子で争いが起こる始末であった。両親は、長兄の帰国が遅いので、私に理髪店を継がせようと思い、私に理髪店を手伝わせた。やがて、長兄が帰国すると、後継ぎは元どおり長兄になり、私は邪魔者になった。母も、本音ではなかろうが、「他人の飯を食わなければ、男は一人前になれない」と私を追い出しにかかった。私は小学校の恩師に就職口の相談をした。先生は、洋服店の住み込みの仕事を紹介し、自ら保証人になってくださった。洋服屋に勤めてみると、すごい労働条件だった。朝は6時から仕事が始まり、夜は12時に終わった。店には野良犬がお世話になっていると自分に言い聞かせてがんばった。勤勉に明るくがんばると外部から評判が得られたが、内部からは「お前は覚えが悪い。この仕事はやめろ」と足を引っ張られた。先輩の磨り減った下駄をいただき、洗って、鼻緒を自分で作って再利用した。ある日、軍隊の国防色の生地を紺色に染めるために、早朝、千葉県の大網まで反物を持って行って、店で朝食が用意される前に戻って来た時、主人は私を褒めてくれた。先輩に負けまいと思う気持ちが強く、先輩から素直に教わる気持ちが足りなかったことは反省している。私は、職人としての技能を磨くとともに、人には謙虚に接する様心掛けたので、お得意もできた。

もちろん私は、戦争に反対である。当時は、戦争を仕方ないものと思っていた。戦争被災者が政府に補償を要求するのは情けないと思っていたが、最近は大地震で政府が補償をする時代になった。時代が変わったと思う。

(編集委員注)

高森十四男さんは研究心、努力家、楽天性に恵まれた方です。名刺には、「千葉県の名工」と書かれ、知事賞、労働省局長賞等の受賞歴も書かれています。今も誇りある現役のテラーです。ここには、掲載できませんが、お会いにな

れば戦後の住み込み職人、商い、暴力団とのやり取りなど痛快な話を聞かせてもらえます。

匿名（Sさん）証言（10歳、国民学校5年生、旧市原郡富山村）

私は、現在千葉県市原市加茂で生まれた。家族構成は両親、祖父母、私、弟そして妹の7人家族である。父の職業は公務員であった。母方は地主の農家であった。父母は普段は農業をしていなかったが、戦時中の農作業の労働力不足のため農作業を始めた。タバコも栽培していた。

父は、1941年夏に佐倉連隊に召集された。外地へ出征する前、家族の面会があった。母、私、弟、祖父が父に面会した。父と母が何を言ったか覚えていない。父からの軍事郵便があったが、引っ越しで紛失して、1通の葉書は残っている。父は中国からビルマ（現在、ミャンマー）に渡り、戦争が終わった。

私は、1941年4月に旧市原郡富山村立国民学校に入学した。この年から、国語の教科書が軍国主義的に改定された。それまでは、「サイタサイタ サクラガサイタ」であったが、「アカイアカイ アサヒアサヒ ススメススめ ヘイタイ ススめ」になった。国民学校の教科は、修身（私はこれが一番嫌いだった）、国語、社会、算数、理科、図工、音楽、家庭、体育であった。体操は行進、まわれ右、直立不動の姿勢を求める軍国教育だった。男子は竹槍訓練、女子は高学年や高等科の生徒は薙刀が盛んに行われた。女性の先生が朝礼台の上で指導した。その姿にはりりつき（凛々しさ？）があった。部落から出征兵士が出ると、子どもらは兵士を神社から表通りまで、バンザイを叫び見送った。

学校では、行事毎に校長が教育勅語を読み上げた。私たち子どもは全文暗記した。校長が読んでいる間は、顔をあげることは許されなかった。先生も、子どもたちも一張羅の服装で集まっていた。学校では様々な作業が求められていた。1942年、1943年になって戦争が激化すると食糧増産運動が進められた。学校のグラウンドが苗床に変身した。全学年児童の仕事として堆肥づくりが導入された。雑木林で枯葉を集め、学校まで運ぶ競争をしている。戦後、「子どもらはおだてるとなんでも喜んでやった」と感想を漏らす教師がいた。3年生の仕事はウサギの飼育で、4年生の鶏の飼育で、5年生は羊の飼育で、6年生は牛の飼育である。餌の草は生徒が各自集めて登校した。また、農家の男性が出征したので、労働力が不足した。田植え休暇、稲刈り休暇で児童を労働に駆り立てた。地域は、労働力の過不足を児童の労働で補っていた。児童は赤ん坊を背負ったり、牛馬の餌の草を刈ったりした。私は自分の弟や妹の面倒を見るよりも隣の赤ん坊の面倒を見た。農家の人は朝から夜まで働くので、母親は、作業中

に赤ん坊に母乳を与えた。戦争遂行のための隣組制度は、近所が助け合うことで成り立っていた。夏休みに、干し草作りと松ヤニ採取が求められた。私は田んぼの草を集めて乾燥させて学校に届けた。松ヤニは松の幹に Y 字型に傷をつけて下に空き缶をぶら下げて採取した。学校から炭を供出することになった。木を炭焼き小屋まで運び、炭焼き小屋からできた炭を 1 俵 4kg の俵を背負って倉庫まで運ぶのだった。このような作業を通して、私は 8、9 歳から鋸、鎌、金槌を使えるようになった。10 歳の経験が薄いベニヤ板も上手に切れるようになっていた。

このような児童の労働がどのように生かされたのか不明である。宿直の教師は児童の飼育している卵を食べていた。

山村にも空襲警戒警報が頻繁に発令されるようになったのは 1945 年であった。小型機が編隊で飛来した。私たちは地面に伏せて、両手で目と耳と鼻を押さえて体を守った。村には、犠牲はなかった。空襲警報の度に裏山に逃げたり、道路トンネルに逃げたりした。終業式をトンネルの中でした。内部に電灯がないので文字は読めなかった。旧富山村は、市原郡の奥深い農村地域なので縁故疎開者が多く、児童が倍に膨れた。

部落に毎年戦死者の供養にくる僧侶は「部落の戦死者は多い」と最近話をしていた。私の親類にも南太平洋の島で妻子を残して戦死している。

戦後、同窓会に、1 年生の担任の女性の恩師を招いた。恩師は私たちに「みんなは字が書けるの？戦争中、勉強はしないで作業ばかりをやらせたから。」と尋ねた。またその恩師が「このクラスの担任を受ける人がいなかったので私にまわされた」と回想した。“うるさい”親がクラスに集中していたらしい。

また、70 歳を過ぎた同窓会でも、疎開中の苛めが問題になった。言葉、服装、仕草は苛めの対象になった。田舎組が都会組を「苛めた」と非難したが、田舎組はそれを重大に捕えていなかった。苛めは子どもだけでない、嫁いじめ、外人いじめ、未解放部落出身者いじめがあった。これは大人社会の問題である。

1945 年 8 月 15 日に重大放送があった。私は家畜当番で放送は聞かなかった。校庭では「日本は戦争に負けた。九十九里に上陸してくる。アメリカ軍が占領すると何をされるかわからない」と恐怖心を起こさせる発言を聞いた。この日は大変暑く、蝉がジージーと鳴いていた。

私は戦争を苦しいとも、寂しいとも思わなかった。子どもを守る大人が一杯いるような社会だった。小さい時の教育がとても重要である。テレビのお笑い番組は、人の失敗を笑っているが、みんなが助け合って嬉しい時に見せる笑いがほしい。

b. 東京 (11 人)

加藤季徳さん証言 (当時?歳、鉄道省勤務)

私は愛知県岡崎市出身で、戦中・戦後の 4 年間は土浦にいたが、艦砲射撃が恐ろしかった。空襲の場合は飛行機が頭上に来る前に投下した爆弾で被災する。頭上で投下した爆弾は先に落ちる。B29 が高度 200-300m の低空で爆撃したこともあった。千葉市大空襲の日には千葉にいなかったので千葉空襲のことは体験していない。仕事は電気通信技術者でありながら、文部省国民精神文化研究所に”派遣”された。自称右翼である。判任官になった。3 月 10 日東京大空襲の時は東鉄にいた。東京空襲のとき天井を突き抜けてきた 2 発の不発焼夷弾をつかんで、一つは道路へ投げたら火がついた。もう一つは防火用水に投げ込んで消した。通信係長の時鉄道省本部を上野の西郷隆盛像の下に移転することになった。一部京成電車と同じ軌道を使用したけど、ゲージが合わないためにレールは 3 本になった。いよいよ占領軍が来ることになり、鉄道省本部から書類を焼却するよう命令を受けた。占領軍が来ると書類の提出を求められたので、あちこちから未焼却書類を探してきて青焼きコピーして提出した。千葉鉄道管理局では通信区長で退職した。記録を本にすることは苦手だが、私が編集委員になっている千葉鉄道管理局史の付録には戦争犠牲鉄道職員の名前が記録されている。それによると犠牲者数は機関区 21 名、通信区 4 名、千葉駅 9 名、建築区・車掌区・電車区はいずれも 0 人であった。

浜中ひろ子さん証言 (9 歳、小学校 5 年生、東京葛飾)

—「赤紙が来た」—

1935 年 (昭和 10 年) 生まれの私が、奥戸国民学校 (今の小学校。国に奉仕する小国民を育てるための教育をするという目的なのであろう) に入学した 1941 年に太平洋戦争が始まった。当時、私の家族は父と母と子ども七人で東京の下町、葛飾に住んでいた。私はその末っ子であった。二年後に妹が生まれた。二年生の時に、長兄に「赤紙」が来た。「赤紙」が来ると、徴兵制度で否応なく国民は戦争に狩り出され、誰も拒否することはできなかった。兵隊検査 (身体検査で選別され、兵隊さんとしての適性を判断するもの) で、長兄は甲種合格、最高ランクと判断されたのだ。病弱だったり、障害があったりするため戦地に行って「天皇陛下の為に」戦うことができない者は「非国民」の烙印を押され、人間失格者として白眼視され、家族も含めて肩身の狭い生活をするようになるのだ。長兄は、即座に海軍に入隊が決まった。母はとても喜んでいたが、今考

えれば心中はどうだったことであろうか。愛する倅を戦地に送り出すのだ。お国の為には夫や倅を出すことは、名誉なことでは涙を見せることは、あつてはならないことなのだ。それが「銃後の母」の心得であった。

当時の私には、母の真情は伺い知ることができなかった。入隊の日、町の神社に町内の人が集まり、「万歳、万歳」と見送ってくれた。長兄は、軍隊風の敬礼で、それに応えていた。兄の心中も、私には測り知ることができなかった。天皇陛下の御ために戦争に行くことは、名誉と教育されていた私は、それがうれしくて日の丸の小旗を振ってはしゃいでいた。今思えば何ということをしたのかと思うが、その頃は言われるままに信じ込んでいたのだ。やがて、次兄も徴兵され、同じような光景が繰り返された。さらに、二人の従兄弟はルソン、ガダルカナル島で戦死した。二人とも親類中から将来を嘱望される若者であった。特に上の従兄弟は東北大医学部を首席で卒業、年寄りたちは親族の出世話になると噂をしていた。遺骨はついに還らなかった。戦死通知と共に石ころが一つ入った白木の箱が遺族のもとに届いた。二人の遺骨は今も南洋の島で野ざらしになっている。私の二人の兄はともに国内の軍需基地に配属され、生還した。下の兄は多くを語らず、詳しいことは聞いていないが、上の兄は千葉館山の軍事基地に配属され、敵の上陸に備えていたが、激しい爆撃を受け、九死に一生を得た。塹壕の直ぐ傍に爆弾が投下された。大きな負傷を負わなかったが、爆音の為に右耳の聴力を失った。その兄は2年前に亡くなった。亡くなるまでの10数年間、植物状態で、チューブにつながれていた。人生最良の青春を戦場に駆り立てられ、安らかであるべき晩年をあんな形で終えた兄の生涯を思うと胸詰まるものがある。

—「空襲」の経験—

私が住んでいた東京葛飾地区が空襲されたのは、九歳の時、奥戸国民学校に通っていた時の三月東京大空襲である。当初は、軍需工場を標的にしていた爆撃が焼夷弾を用いた無差別絨毯爆撃である。あの日、看護婦をしていた姉と運送会社に勤めていた父は朝から不在であった。父がいつものように、当時の男性が着用を義務付けられていたカーキ色の標準服で火鉢に足を乗せてゲートルを巻いていたことを覚えている。

東京大空襲で空襲警報、敵機来襲のサイレンで、私と二歳下の妹と母は、防空頭巾（綿入れの手製の頭巾で氏名・住所・血液型を縫いつけてある。負傷時の輸血、死亡時の身元確認のためである）をかぶり、雪解け水のたまった防空壕（地面を掘り、材木を渡して上にトタン板と土をのせてあった）の中に身を潜めた。B29（米軍の重爆撃機）から無数の焼夷弾が投下され、私たちの防空壕のすぐ傍にも落ちた。支えの材木が崩れ、私と妹はその下敷きになった。周囲には激しい炎があがり、すぐ傍の三階建てのビルが崩れかかってくる。母が

半狂乱で泣き叫びながら二人をやっと引っぱり出してくれ、からくも命拾いした。しかし、私の防空頭巾に火の粉が飛んで燃えだした。スコップを持った男性が土をすくって私の頭に幾度もかけて火を消してくれた。どこの人か覚えていないが、私はその人に命を救われた。1軒先の小父さんは、防空壕から首を出したところに爆弾が落ちて亡くなった。このように避難した防空壕の中で火と瓦礫の下敷きになり、葛飾地区でも死者は2000-3000人と言われるが正確な数は分からない。ある朝、姉さんの結婚式だと新しい下駄を履いて嬉しそうに本郷に出かけた小父さんは二度と帰ってこなかった。当時、奥戸は川を挟んで向こうには藁屋根の農家があった。藁屋根に無数の焼夷弾が突き刺さり燃え上がった。藁に刺さった焼夷弾を抜いて川に捨てようとして手首から先を失った人もいた。一家全滅の家もたくさんあった。七十を越えた今も身震いする記憶である。もう二度とあんな経験は誰にもさせたくない。

—学童疎開—

私が妹と担任の先生と1年から6年までの50人位で新潟県妙高寺市の東本願寺別院の寺に学童疎開したのは、東京大空襲の後である。私は4年生、妹は2年生であった。空を覆うばかりのB29が東京の上空に来襲、雨のように爆弾を投下し、東京は焼け野原、正確な数は今も分からない程の一般人が命を奪われた大空襲である。親戚のある人は安全な田舎に引っ越す縁故疎開、頼る先のない家では、せめて子どもだけでもと送り出したのが学童疎開・集団疎開である。小学校の児童が親元を離れ、見知らぬ土地へ戦火を逃れていくのだ。親子の一生の別れとなるかもしれない。しかし、せめて子どもだけはと言う苦渋の決断である。私たちを離したくないと疎開の誘いに応じなかった母が決断したのはあの大空襲の惨状を目のあたりにしたからだ。

大空襲の数日後、江戸川堤に通じる道を髪の毛が焦げ、ぼろをまとった人が、タイヤが熱で溶け、鉄だけのリヤカーにわずかな物を載せて、続く数十人の列だ。子どももいた。その列を不思議に思い眺めていたが、母に「見世物じゃない」といつにもなく強い調子で言って、腕を掴んで家に引き入れた。江戸川を越えて千葉を目指していたと言うのだが、今にして思えば、その千葉も苛烈な空襲に見舞われていたのだ。果たして、あの人たちはどうなったのか。今、思っても胸が痛む。疎開列車に乗り込んだのは小岩駅、互いの無事と再会を願う親子の涙の姿であふれていた。私は妹と二人、ただ茫然として、父母に何を話したのかさえも記憶から消えてしまっている。

列車が乗り替え駅の両国駅に着いた時、空襲で亡くなった人の遺骸を焼く強烈な臭いが立ち込めていたのを、はっきりと覚えている。最寄りの妙高寺駅に到着。初めて見る身の丈を越える雪に言葉を失った。改めて、例えようのない心細さに襲われた。雪の壁に挟まれた道を悪戦苦闘しながら、やっとのことで

寺にたどり着いた。慣れない雪国の生活はきついものだった。藁草履での登校は足が濡れ冷たく草履は数日で擦り切れた。

沖縄出身の四十代の男の先生と寮母さん四人で五十人の子供のすべての生活を世話するのだ。どれ程大変なことであったか想像がつくと言うものだ。みな本当に良い人たちだった。突然親から引き離され、遠い見知らぬ土地での幼い子供がどんな心の状態であるか。先生方の苦労と心労は大人になってひとしお深く思いだされる。特に沖縄出身の男先生は実にいい先生だった。親身になって四六時中心を配ってくれた。戦争も終わりに近づき、米軍が沖縄に上陸したというニュースをラジオに耳をこすりつけるようにして、毎晩聞いていた先生の引きつった顔を思い出す。日本が末期的情報を国民に流すはずがない。アメリカの放送を傍受していたと後で聞いた。雑音に紛れたニュースを食いつくように聞いていた先生の姿を思い出す。私たちには何も話さなかったが、先生の胸中はいかばかりであったろう。

ただ、私たちは他の集団疎開児に比べて幸せだった。地元の人たちが心優しい人たちで、ささやかながら何かと援助してくれた。おかげで新潟は米の産地でもあったためか、野菜と米半々の「おじや」だけは毎日食べることができた。戦後六十余年、私たち疎開児童仲間は、今も当時お世話になった地元の人と交流を続けている。別のところに疎開した知人の話は悲しいものである。空腹に耐えかねた子供が、深夜、数人で農家の芋畑に盗みにはいり、泥のついた生の芋をむさぼっていると、ガサガサと人の気配。見つかったかと身をひそめると、それは芋を手にした自分たちの先生だった。子供のために盗んだのか自分の空腹を満たすためかはわからなかったが、芋畑の中で先生と子供がただ抱き合って声をあげて泣いたというのである。学童疎開の実情はどこでもこれに似たようなものであったのだろう。地元の人たちの生活だって厳しいものだったはずだ。よそ者は邪魔ものでしかないのは仕方がないことだったのだ。学童疎開経験者は誰もが、「親が恋しかった、夜になると布団にもぐって毎晩泣いていた」、「いつもいつも腹が減っていた」と口をそろえる。

しかし、恵まれていたとは言っても、お腹はすく、おやつのもも恋しい。そんなある日、母が送ってくれた小包の中のお手玉に数枚のビスケットが潜ませてあった。皆が寝静まったと思った夜中、妹と二人で布野にもぐって食べていると、匂いに気づいたらしい一人が「何か食べている」と騒ぎだし、大騒ぎとなり、先生が飛んで来た。蒲団を引っぺがされてお手玉ともども取り上げられた。先生が何と行って叱ったか覚えていない。何も言わなかったような気もする。私はただ恥ずかしかった。このことは母には話していない。子供ながら母の気持ちがわかったし、先生の気持ちも、そして告げ口した友達の気持ちだって分かっていた。

五年生の八月十五日、先生から「戦争がわった」と聞かされた。私たちには戦争が終わったことへの感慨などなかった。ただ、家に帰れる、親に会えるということしか考えられなかった。親たちの何人かは三々五々と子供を連れ戻しに来た。しかし、残されたほとんどの子供が、一緒に汽車に乗ることができたのは、その年の十一月一日であった。上野駅に着いて、建物一つ見ることのできない焼け野原の東京に息を飲んだ。小岩駅に到着。出迎えの人の中に必死で手を振る母と兄を見つけた時のあのうれしさは、生渡忘れる事が出来ない。

もう誰にも、あんな経験はさせたくない。させることはできません。自分体験をとおして、これだけは言わねばならないと思う。

杉本敏子さん証言（14歳、軍需会社東京本店会社員、千葉県柏市）

私は終戦の年に高等国民学校 2 年制を卒業して、東京都旧神田区佐久間町に母親、兄と共に 3 人暮らしで住んでいた。父の職業は釣り竿屋で、1943 年に病死した。兄は 19 歳で志願して入隊して、東京市谷にある参謀本部の電報班の兵隊で、家から通勤していた。その後、1945 年 3 月 10 日の東京空襲で家が焼失し、親戚を頼り、1945 年 5 月ごろに千葉県柏市に引っ越した。

駅から遠い松ヶ崎だったが、1946 年 6 月、駅に近い工場の工員社宅が終戦で使われなくなったので、焼け出された人、引揚者、疎開者を入居させてくれた。八軒長屋で、6 畳・3 畳の板の間と屋根は杉皮張り、でも本当に嬉しかった。

私は卒業した高等国民学校から引き続いて学徒動員で青梅に移転した工場に行かなければいけなかったが、家を焼かれ母と離れるのが辛かったので行かなかった。1945 年 5 月、兄の友人の紹介で軍需会社の本店に給仕として就職した。東京は空襲が頻繁にあったので、会社を休みがちだった。

会社では、軍国主義を説くような人はいなかった。私は、いつも空腹だった。家では弁当を作ってくれるが、少量のごはんに極小の蒸しジャガイモ 3 個程度であった。これは柏の自宅から柏駅まで 45 分歩く途中、人気の少ないところで、食べてなくなってしまった。会社に行けば、食堂食券をくれる人がいた。私は、当時一番年少なので、会社の人から「ちびちゃん」と可愛がられていた。会社から社員が召集されたとき、彼は職場に出征の挨拶にまわった。駅までは見送らなかった。会社から離れていた野球場は食糧増産のため畑になった。

東京の 3 月 10 日の大空襲の前の 2 月 25 日に前日降った雪が積もっている昼間、空襲があった。大通りを越えた向こう側が全焼し、私の家は残った。その地域の一角に軍の工場があつて、その焼け跡の半地下を隣組で防空壕に建設した。ところが、3 月 10 日の空襲では、逃げ惑う通行人もこの防空壕を利用しよ

うとした。隣組の人は彼らを追い出そうとした。その時、参謀本部が非番でいた陸軍曹長の兄は長い軍刀を背にしょって、いろいろ皆に指示した。軍刀を背にしょっていた理由は、腰に下げていると作業ができなかったからである。兄が「ここから、若い者、男は出なさい」と言って、老人、子ども、女性を優先させた。当然、隣組から「余計な人を入れるとは・・・」と非難の声が出たが、兄は軍人として権威を示しながら強行した。老人、婦人たちは「兵隊さん、兵隊さん」と言って兄に感謝した。私は若いので出なければならなかった。不満はないが、私は2月25日の空襲で黒焦げのマネキン人形みたいになっていた犠牲者を見ていたので、防空壕が必ずしも安全な場所ではないことを知っていた。だから、私は、みんなの前で兄にはっきり「前の空襲で防空壕に避難した人が、一酸化炭素中毒や高熱で、死んでいた。兄さん、ここにいたら危ないかもしれない」と言った。兄は、「残りたい人は、残りなさい」と指示した。この時の兄は弱いものに優しい態度であった。

1944年秋頃、小田原の叔母の家へ食糧を買出しに行った時、小田急線の伊勢原で、空襲警報となり、乗客全員車外に下りて草むらに伏せた。3機を1編隊とする3編隊の艦載機は頭上を通過したが、発砲して来なかった。でも、怖かった。

東京都にいたとき、佐久間国民学校に通っていた。5年生の時、1941年12月8日、開戦日の朝礼では、特別に教頭先生から話があった。要するに、日本はアメリカやイギリスと戦争になった、しかし、日本は神の国だから、必ずいざというときには神風が吹くから、みなさんは体を鍛えてくださいと訓示した。その話の中で、米軍機空襲のときは両手で目と耳を塞いで机の下に入る注意を与えた。私は、これはおかしいと思った。神風が吹くのになぜ、空襲が起こるのかと。教師が生徒に両手で目と耳を守る仕草を「面白い格好ですが・・・」と説明したら、隣のクラスの教師が「重大な話なのに、面白いとは何事か」と自分の生徒に話した。その生徒が私達にその話を伝えた。生徒も教師もうっかりした言葉を使えないようになっていた。佐久間国民学校の6年生は男子組59名、女子組57名、合組56名に分かれていた。私は、合組に入っていた。授業も体育を重視するようになって、私は薙刀（なぎなた）を練習した。戦争開始後、1942年にミッドウエー海戦があったが、先生はこの話を生徒に言って聞かせた。その大本営発表は敵戦艦○隻撃沈、敵巡洋艦○隻撃沈と言うものだった。国民は戦勝を信じていたが、後になって、これは、ほとんど嘘だったことがわかった。学校では、「鬼畜米英!」、「欲しがりません、勝つまでは!」、「贅沢は敵だ!」とかの戦争標語を教えた。戦時中、女性の軍国的運動は大日本婦人会があった。1944年10月ごろ、神田区佐久間町の人が「日本は戦争に負ける」と言ったことがあった。隣組の男性達が、その人の家に押しかけて「お前は非国民だ。国

民はがんばっているのに、その発言は許さない」と正直に正しいことを述べた人をぶん殴って沈黙させた。ここには言論の自由が足元からないことがわかる。これは国民への洗脳教育の恐ろしさを示している。

高等国民学校の女性の担任先生は、空襲で家を失った私と家族を柏に移るまで、先生の自宅に住まわせてくれた。さらに、空襲で行方がわからないことにして、青梅の動員をはずしてくれた。先生は生徒一人一人を大切にしてくれた。先生の家も終戦間際に戦災で焼けた。

高等国民学校1年(このときは女子組編成)では、英語はABCと**This is a pen. This is a dog.**ぐらいは教えてくれた。英語はそれだけだった。夏休みから、産業戦士として駆り出された。今の三井記念病院近くの凸版印刷では、印刷後の満州国国債の券だと思われる(?) B6判ぐらいの大きさの紙の印刷ミスを見つける仕事である。さらに動員は本格的になり、神田の製本会社に学徒動員されて、海軍水路部の海図製本の仕事をやらされた。新聞を広げたよりやや大きい版のページを合わせて海図を竹のヘラで折っていく仕事である。1日に1800枚から2000枚の仕事である。大柄の女子は海図を機械で製本する(綴じる)仕事についていた。他の女子は徳力という金属の会社で勤労奉仕をした人もいたが、内容は知らない。勤労奉仕中にも昼休憩時間はみんなでコーラスをした。会社から規制はなかった。会社では、朝礼が時々あった。水路部の仕事は本来、軍事機密であるはずである。だから、海図をよく理解できない高等国民学校の生徒を動員したのだと思う。会社での昼食は糞尿を運ぶような桶でピチャピチャと音を立てて運ばれる雑炊であった。昼休み時間に私達は「椰子のみ」、「愛国の花」、「ああ、紅の血は燃ゆる(学徒動員の歌)」等をよく歌った。米英の歌は禁止されていた。「愛国の花」は「1. 真白き富士の気高さを、心の強い盾として、御国(みくに)に尽くす、おみならは輝く御世の山桜、地に咲き匂う国の花、2. 老いたる若きもろともに、国難しのぐ冬の梅、かよわい力よくあわせ、銃後にはげむ、りりしきは、ゆかしく匂う国の花」と歌う。これはメロディがきれいだ。海軍の軍人が行進するとき、彼らが歌う歌「艦船勤務」も歌った。「四面海なる帝国を守る海軍軍人は、戦時平和の別ちなく、勇み励みて勉むべし」も力強い歌だった。私達は、このとき皆で歌った歌は忘れない。

私は3月10日の東京大空襲の体験は生涯忘れない。私は2度戦災を体験したのである。敗戦色濃い1945年1~3月、毎晩決まったように夜半にかけて米軍機の空襲があった。2月25日、焼け野原になった所に作った近所の防空壕から空を恐る恐る見上げると、何と美しい星が、宝石を散りばめたように輝いていた。つかの間に地底から響くようなB29の爆音が聞こえて、花火のように焼夷弾が落とされた。折からの強風で、町内のあちこちから火の手が上がる。壕から男性と12歳以上の出された者は壕の土手横に身をかがめて、降りかかる火の

粉をお互いに払いのけながら壕を見守った。強風が鋭い虎落（もがり）笛を立てて、炎を煽った。建物が焼けて倒れると炎は勢いを増して、道を紅蓮の炎にして、地面をのたうち回る。その有様は、まるで地獄のようだった。私達は 2 月 25 日の空襲で、焼け野原になった所があつて逃げ場があつたが、逃げ場のない人たちは、その時水が少なかった神田川に飛び込んだその水面の上にも走る炎で焼け死んだ。また、その後、満潮になり、増した水かさで溺死した人もいた。私と幼友達は強風と煙と火の粉が目に入ったので、ほとんど目を開けることはできなかったが、母に手をひかれ、神田川的美倉橋を渡って、焼け残った避難所へ行った。その途中、細く明けた目で真っ黒の物が川べりに折り重なっている山が見えた。目は水洗いを 10 日ぐらいやって治った。防空壕の脇にかがんでいる時に友人の防空頭巾に火の粉が付いてくすぶっていたので消してあげた。友人は「敏子ちゃんがいなかったら私は焼け死んでいた」と言った。この大規模な空襲で 10 万人の人が亡くなった。私の伯母と従姉妹は浅草の言問橋付近で行方不明になった。焼死したのだ。

1945 年 8 月 15 日はお盆で千葉県柏市松ヶ崎の自宅にいた。重大放送があると聞いていたので、家主の家でラジオを聞いた。しかし、雑音が多く、ほとんどわからなかった。雑音は誰かが、妨害電波を出したと聞いた。後から、大人が日本は戦争に負けたのだと教えてくれた。戦争に負けるとは信じられなかった。勝つと思っていた。戦争に負けるとは青天の霹靂だった。これから日本はどうなるのか、私はどうすればいいのか？でも、ほっとした面もある。ゆっくり寝られる。翌日、会社に出勤すると大騒ぎだった。会社のビルは焼けなかった。1945 年 8 月 30 日以降、米軍の進駐が始まった。占領軍本部は GHQ と呼ばれた。後で聞いたことだが、東京丸の内近辺のビルは、戦後米軍が接收するので爆撃はしなかったそうだ。会社はビルを接收され、銀座の焼けビル全館を修理して、全部移転した。その後、接收解除になり、ビル内を大改修して、1956(昭和 31)年 7 月に会社は元の隣ビルに移転出来た。

戦後、財閥は解体された。社名は変更したが、1952 年 7 月元の社名に戻った。終戦後、会社員が、出征中に臨時に雇われた人は、社員が復員してくると解雇された。復員社員は海軍服や陸軍服のまま会社に来て、挨拶した。私も無事に帰国できた人々を祝った。兄は残務整理を終えて参謀本部から、高級な洋酒とか、貴重な食料品をもらって復員した。この酒は、闇市で食料に交換された。戦後の食糧難はひどかった。水みたいな雑炊、サツマイモ、芋づるであった。あぜ道のセリ、ヨモギ、雑草のアカザ等を食べた。あぜ道のセリはとても美味しかった。空襲で会社を休んでいる時、空襲警報が解除されると、母と競って田セリを摘んだ。新宿の食品工場が空襲で焼けたが、その焼け跡にある焦げた砂糖などを食べた人がいる。ところが、そこの殺鼠剤のネコイラズを食料と間

違えて食べて死んだ人もいた。空襲で親と家を失った子どもたちは上野駅から西郷隆盛銅像の下に通ずる地下道にたむろして住んでいた。そこは臭気が強烈だった。私が上野に行って弁当を食べているとき、浮浪児が来て私に物乞いした。私はあげるゆとりがなく、怖くて逃げた。戦中、志願して軍人になった兄は、戦後になって、心の中心を失って、兵隊崩れになっていた。広告会社に勤めたが、いい人生でなかったようだ。当時、柏を通過する成田線、常磐線は上野まで汽車で、私は汽車で通勤したが、列車が不足していたので無蓋貨物車や有蓋貨物車に乗った。ブレーキがかかると内部に持つものがないので、乗客はずるずると前のめりに倒れた。私は、通勤を利用して、通称、運び屋もやった。通常の通勤より2電車速い電車に乗って、一回あたり3.75kg程度（尺貫法では1貫目）の小麦粉を左右に1個ずつ東京のパン屋に運んで小遣いを稼いだ。戦後、会社の幹部がみんなを集めて、これからはアメリカ人も会社に来る。その際、座る式のトイレは使用后、紙できれいに拭いておかなければならないとエチケットを教えた。1956年、米軍のビル接收が解除され、会社は元のビルの隣のビルに帰ってきた。その後も、引き続き会社に勤務していたが、6、3、3制及び、新制大学を出た人たちがたくさん入社して来た。戦中・戦後に勉強できなかった自分に強いコンプレックスを感じ、7歳も年下の生徒たちと夜間高校（定時制）で学んだこともあって、会社の事務に少々自信を持てるオフィスレディーになった。そこで、1962年（昭和37年）職場結婚して退社した。千葉市に来たのは1975年であった。はじめは土気にいた。私の少女時代の戦争を思い出して作った歌は次のとおり。

東京に一灯もなき管制下 輝く星の神秘を見たり
空襲下やきくずれゆく家々と 道這う炎地獄絵のごと
原爆が友の青春ひきさきて 失意に暮らすこの半世紀（長崎で被爆、2001年逝去）

- 戦争は悲惨である。食うか食われるかの戦争である。
- 若い人たちに絶対戦争はさせたくない。若い人に憲法第9条の大切さを知ってもらいたい。
- 憲法9条を断固守らねばならない。

石塚節子さん証言（6歳、東京都台東区浅草竜泉寺町）

私たち一家9人は1945年3月10日の夜中、米軍機300機が焼夷弾による夜間攻撃し、東京の台東、墨田などを、約2時間半で10万人が焼け殺し、負

傷者4万、被災家屋27万戸をという東京大空襲を東京・台東区浅草竜泉寺町で遭遇した。木造長屋（十世帯位）の密集地が私たちの住まいでもあった。

父（39歳）は民間の電気工事会社に勤務で、当日出張中で留守だった。翌日帰省した父は茫然としていた。母と次姉が弟をおぶい長姉は布団を背負い、私と妹とすぐ上姉で手をつなぎ7人で戦火をくぐり逃げた。私は、国民学校入学を20日前に控えた6歳であった。母は「みんないるか」と7人の名前を叫び続けた。近所の人たちは皆焼け死んだという話を後で聞いた。母は「うちは誰も焼け死なせないですんだ」と言った。知合いの人から「おかみさんはしっかりしているわね、えらい」と褒められているのが聞こえた。まさに偶然死なないですんだのかと子ども心にそう思った。目が覚めたら、台東区三ノ輪国民学校体育館にいた。

翌朝、丸裸の丸焦げの1万人か、2万人か、一面死体が累々と。丸焦げの死体は焼き芋のように真っ黒。顔は引っ込んだ目、口は、パカッと開いたまま。体は丸まったり、うつぶせだったり。止まったままの都電の中も死体が重なっていた。死体をまたいで、自宅に向かった。人間の死体をまたぐことに罪悪感もなく、黙々と前に歩く人たち。こんな時人間の感覚は「マヒ」してしまうのか。死体をまたぎ歩いたあの時の自分に感覚はなかったのか。なんだったのか。

家の地下防空壕に埋めてあるお米、缶詰を掘り起こしに行った。住み慣れた家は跡形なく当たりはまだ煙がたっていた。焼け焦げた鯛の缶詰が5缶ぐらいあったか。「食べるものがあってよかった」と喜んだ。

砂町の従兄弟の家が焼け残ったと聞き、空腹を抱え、半日も歩いて、隅田川を渡り砂町へたどり着いた。町は累々と死体の山であった。隅田川も死体が山のように海に向かって流れていた。道々の「防火用水」に頭を突っ込んだ死体だらけ。

死体を兵隊が、シャベルでトラック積んでいるのを見た。その時はじめて悲惨を感じた。

私は大空襲の前日、三ノ輪国民小学校入学身体検査を受け、ランドセルも買ってもらい20日後の1945年4月1日の入学式を楽しみに待っていた。

それまで、子どもたちは群れをなし遊んでいた。水飴をなめながら紙芝居をみたり、浅草のほうづき市を見にいったり。吉原へおいらんを見に行った記憶もある。楽しかった。面白かった。

2人の姉は女学校にもいけず、生活は一変……。

集団疎開に行っていた次姉も実践女学校試験受験のために東京の自宅に帰っていた。女学校合格し、喜び勇んでいた。

3月10日を起点にして私たち一家9人は一変した。

祖父がいる農家の母の実家がある千葉県君津郡環村（いまの富津市）に疎開

した。会社焼け、田舎に引き上げた父親は失業した。38歳の父にも召集令状がきた。父は、母に「俺にも召集令状が来るようでは、日本は負けだな」と言っているのをそばで聞いた。戦後1946年1月に妹が生まれて10人家族になった。農作業小屋一軒の暮らしを4年間続けた。12畳にムシロを敷き、隅に囲炉裏を掘り、小屋の裏にかまどと流しの急ごしらえであった。お風呂は祖父の家のもらい風呂であった。2人の姉は泣く泣く高等女学校を断念した。高等小卒止り。下町は習い事の多いところだった。2人の姉は、珠算三級を持っていたし、書道の稽古もしていた。高等小学校卒業し、14歳から、それぞれ、村の郵便局と農協から口がかり就職した。しかし、後々まで「勉強したかった」の思いが強く残る。

私は小学校1年生の時から、親戚や近所で、農繁期に「子守り」をしてほしいと頼まれて行った。給金等なく、昼夜の白米のご飯食べたさで行った。

姉妹は、祖父の用意した畑づくりや山に枯れ枝ひろいと、食べるためのことはなんでもやった。時々、祖父が、私をそっと呼びよせた。「カゴをもってこい」と。そっと、カゴいっぱい白米を持たせてくれた。「なんとおいしいご飯!」と思った。家の周りにカボチャ、ナスなど食べられるものは植え、丹精して育てた。麦飯の中にカボチャを入れたご飯を、今、思い出し、その不味さに「いやだった。ぞっ」とする。祖父は内緒でくれたが、白米を孫に腹いっぱい食べさせたかったのだろう。家人に内緒でくれた祖父をいまでも「偉いおじいさん」と感謝している。明治元年生まれの祖父は一九四六年夏に老衰で死亡した。

私は、山仕事以外はすべて経験した。学校では、あの人は「疎開者」だと陰口をいわれた。弁当の中身が違う。疎開者の弁当はサツマイモや麦飯が多い。地元の人は「白米」とおいしそう。大人たちは疎開者に「穀つぶし」という。

電気技師だった父は町の電産（いまの東京電力）で働くことが出来た。母は「うちは田畑がない。高校だけは卒業させたい」、上2人の姉を除いて高校に入れてもらった。母は小学校を終え、すぐに女中にだされ、年季明けから裁縫を習った。子どもには小言も少なく「真っ正直に生きなさい」というくらいで、芯はしっかりした人で89歳まで生きた。

私は、中学生の初めくらいの頃から、この田舎から一刻も早く出たい。東京に出て自立したい、と一途に思っていた。7歳年上の長姉は郵便局で働き、夜中まで猛勉強して、東京の看護学校に合格した。1953年、看護学校卒業と同時に、東京牛込に4畳半のアパートを借り、私を呼び寄せた。私は牛込第一中学3年編入することができた。

中学の社会科の先生が日本国憲法を教えた。「第二次世界大戦で、日本はアジアで2,000万人、日本人300万人が死んだ。その反省にたつて新憲法が誕生した」。天皇制政治の反省も、明快に教わった。戦争犠牲体験の苦しさを解き

ほぐしてくれもらったようだった。頭の中がすっきりした。母方の伯母は小沢山で、男 10 人、女 2 人の 12 人も生み、政府から表彰されたが、うち 4 人の息子は戦死した。戦後、伯母は戦死した 4 人分の恩給を受給したが、1 年後に脳卒中で死んでしまった。

東京で勉強できた喜びを味わった。都立高校卒業後、丸の内にある富士重工業本社入職、10 年働いた。

1962 年結婚、出産、共働き、保育所作り運動に参加して、1967 年、待望の〇〇市立緑町保育所ができた。開園 8 時半の市立保育園だった。当時は時間外保育がなかった。朝、西千葉駅 7 時半電車に乗り込む。片道 1 時間 30 分の長距離はとても出来ない。無理だった。その後、千葉民主医療機関連合花園診療所に転職し、共働きしつつ 3 人の子を育てた。65 歳の定年まで働いた。

妹も弟も同じような苦労をなめつくした。

「東京大空襲がなければ・・・」「戦争がなければ・・・」どうなっていたらだろうか。

45 年ぶりの小学校の同窓会に参加した時、東京で鉄工所経営し、事業に成功した男性が酒酔いし、「俺は疎開者だといじめられた」と泣いていた。多かれ少なかれ疎開者は同じ境遇だった。田畑なく生活できなく東京の高校を卒業し、職を求めざるをえなかった私。当時と全く違い、いま、農業経営は厳しく、同窓会では私は専ら愚痴聞き役になっている。今なお戦争の傷跡深くつづく

姉達は、言い知れぬ苦しかった境遇を経験した。当時、子どもたちは、戦火を逃れるための集団疎開の中で、辛かった思いがいまなお消えず、東京空襲のとき 6 年生だった 2 番目の姉は、昨年、「なぜ、この家で私だけ集団疎開に行かされたのかしら・・・」と私にこぼした。私は「あれは、国の政策だったのよ。国民学校は皆、集団疎開行かされたのよ。私は学校に上がる直前だし、行かないで済んだけど・・・」と答えた。苦しく、辛かった 64 年前のことを涙声で聞かされた。私は身が切られる思いで聞いた。

またも、国民・高齢者を厳しい目に合わせるのか、国民は戦争反対と憲法を守りきる。

いま、2 人の姉は、耳にしたくもない、いわゆる「後期高齢者」の年代で、高血圧、腰痛、白内障と治療のたびに差別医療をうけている。またも苦しめられるのか。真面目に、正直に、一生懸命に働き、生き抜きたいま、少しは楽になりたいとの思いは「贅沢」と言えるであろうか。

日本政府と帝国軍隊は、アジアの人びと 2, 000 万、日本人 300 万の殺戮した反省から生まれた「新日本国憲法」のお陰で、社会保障、医療・健康・福祉そして教育制度をつくった。戦中・戦後を生き残った者は、憲法は世界の「鑑」「誇り」と身に滲みている。

が、今また、国民の血税を国民のために使わない風潮が見られる。学校では、

君が代を歌わされ従わないと罰則が適用される。憲法9条と25条は一体である。1970年代、無料だった高齢者医療費をやめた。昨年から後期高齢者医療で有料化と差別医療を進める。

憲法を正しく学んできた国民は決して黙ってはいないし、行動を起こす。後期高齢者医療廃止のたたかいは60年安保闘争のように日本中に燎原の火のごとく燃え上ったではないか。我々が味わった地獄のような戦争体験を孫に、若者たちに、絶対に遭わせてはならぬ。歴史の歯車を後戻りはさせぬ。

(2004年千葉民医連退職「いまなお戦争の傷跡が……」を加除訂正したもの)

小島とよ子さん証言 (27歳、軍需工場動員扱い、旧東京都杉並区松ノ木町)

終戦当時、私は東京都杉並区松ノ木町の親の古書籍店の留守番役として単身で住んでいた。書籍は家に置いたままであった。私は、仕事はなかったが、何もしていないということは許されない時代であったので、軍需工場に勤務していることになっていた。母は、1945年6月頃に息子の家族など親戚2世帯ぐらい約10人を連れて千葉市更科町に疎開していた。疎開先は縁故疎開でなく、偶然に東京からの疎開者を受け入れてくれる人であった。食糧を工面するために畑を借りた。母は50代になって、初めて鍬を持って働いた。疎開先でいじめはなかった。

私は、もともと神楽坂で生まれた。父はサラリーマンであり、アパート暮らしであったが、生活は楽な暮らしぶりであった。木綿の着物は着たことがなかった。父の兄弟は畳屋、瓦屋、魚屋等を経営していた。ところが、私が9歳の時、父が急死をして、暮らしは天から地への変化であった。私は、小学校4年生で退学した。父の死後、私は鰻割烹料理店に雇われた。昼間は仕入れ、準備で忙しく、夜は10時まで営業していたので、学校に行くことが出来なかった。

母は、私が16歳の時、再婚した。その後、私は自立した。私は、単身であり、母の店の留守役として東京に住んでいたため、自警団や隣組の諸活動を免除されていた。ただ、近所で出征兵士を見送るときは動員された。白い割烹着にタスキを掛けて、小旗を振って見送った。また、千人針を路上で頼まれたり、頼んだりした。これは、白い晒しに赤糸で千人の人から一針ずつ縫ってもらうのである。つまり、1000人の人の祈りが込められているから、死なないということであった。また、胴巻きに5銭硬貨を縫い付けて、死線(4銭)を越えると縁起を担いだ活動もあった。表向きの世間では「勝ってくるぞと勇ましく、誓って国を出からにゃ、手柄立てずに死なりようか」と歌っているが、家族は死

んで欲しくなかったのである。母は出征した息子に千人針や衣服を送ったが、本人の元に到着しなかった。母は息子の服の襟にお金を縫い込む工夫をしていたが、敗戦色濃くなってからは、アメリカに制空権、制海権を握られていたので、輸送船は無事に戦地に着けなかった。

古書を扱っていると、いろいろな人が古本を売りにくる。私は余りよくわからないで購入していた。ところが、家にちょくちょく出入りしていた特高（思想を取り締まる特別高等警察）が「お姉さん、こんな本を出されたら俺も困るが、隠したほうがあんたの身のためだよ」といくつかの本を例示した。大学生が読んでいるような自由主義的な書籍らしいが、題名は覚えていない。ある日、飯田橋駅付近を歩いているとき、警察官に呼び止められて交番に連れて行かれた。容疑は、「なぜ、大学生と一緒に歩いていたか。女のくせに。」と男はとがめず、女だけを悪者にしようとする理不尽なものであった。私は、その大学生と知り合いでもない、たまたま、その警察官が二人連れと勘違いしただけだった。それでも、2時間拘束されて調べられた。私はこの処置に憤慨して、いつも来る特高に不満をぶつけた。すると、所轄の警察官が謝りに来た。憲兵も威張っていた。軍帽、長靴、白地に赤い字で「憲兵」と書いた腕章、サーベル姿で闊歩していた。私は、道であっても挨拶もしなかった。

私は、14歳ぐらいから住み込みのような状態で働いていたので、対米英開戦のラジオのニュースも知らなかった。号外を見て戦争突入を知った。空襲に備えて家具を面に出しておいたら、ラジオは盗まれていた。おかげで、終戦の天皇放送も聴けなかった。天皇の姿を見たのは、戦後、焼け残った映画館で短編ニュースを見たときであった。しかし、無声映画で、(徳川無声らしい)弁士が伝えたので、天皇の肉声は聞かなかった。戦争が終わって、先ず考えたことは、日本はどうなるのだろうか、私はどうなるのだろうか、鬼畜米英のアメリカ軍が上陸してきたらどうしようである。戦後、初めてアメリカ兵を見た。怖くはなかったが、気味悪くて避けた。アメリカ人と話したことはない。

東京大空襲（1945年3月10日）の夜、杉並区松ノ木町の物干し台から、いところが「おばあさん、あそこが浅草だよ」と指さす彼方に大火災が見えた。地上は暗くてよく見えないが、空は真っ赤に染まっていた。私が体験した空襲は、東京大空襲（1945年3月10日）の後、6月か7月であった。空襲警報吹鳴が鳴り、近所の人全員避難所へ逃げた。住民たちは、記憶に新しい東京大空襲の惨劇を教訓にしていた。私は、不思議にも空襲から逃げなかった。警防団の人間は私に逃げるように勧めたが、私は玄関先でB29を睨み付けてがんばった。夜間、B29の6機編隊が立川の日立航空機工場を空襲する際に、杉並区にも焼夷弾を投下した空襲と思われる。B29は高高度を飛行していたが、焼夷弾は6機の編隊から落下途中、36本の子爆弾のバンドが解かれて、花火のように光を

放ちながら落下していった。私は、こんな兵器を開発するアメリカを敵ながら天晴れと思った。夜明けになる前に空襲警報は解除され、近所の人々も戻ってきた。この空襲で、不思議にも私の家を残して、10間四方が焼失した。

私の男兄弟は戦争中どんな状態であったかを振り返る。長兄は、結核を患い、丈夫でなかったため、徴兵検査では丙種合格で、召集はなかった。次兄は、東京の連隊に召集されたが、戦地に行かず、終戦を東京で迎えた。三兄は中国の北支に派遣されていた。第1の弟は、南方に10年間も派遣され、戦地からの便りは届かなかった。マラリヤに罹って帰国した。兄弟の中で最も遅い帰国であった。復員船が不足していた。第2の弟は、九州のアマキ航空隊の飛行学校に志願していた。後1週間戦争が継続していれば、特攻隊に編入されていた。私の男兄弟は全て運良く生還できた。父も戦地に行くことがなかった。私は、35歳の時に結婚したが、相手の男性も兵役に取られる年齢を過ぎていたので、戦死することもなかった。

私は、戦争の時代に、小学校も卒業できず、まともな仕事にも就けず苦労した。これも戦争のおかげだと思う。戦争に負けてよかったと思うのは、勝っていれば今頃、軍部はもっと蔓延（はびこる）ったであろうと心配するからである。戦後、私は結婚もして、身近な人のお世話をしながら生活した。戦後、電車で一緒になった男性が「今は景気のいいことを言っているが、50年もすれば日本は変わる」と言った言葉が本当になるような気がする。戦中・戦後苦労した母は、千葉市大森町で私と一緒に生活したが93歳で亡くなった。男兄弟は再婚した母をやや疎遠にしていたので、母は私を頼りにしていた。母は余り戦争時代を語らなかった。若い人たちは、私の言うことを余り聞いてくれないが、戦争は人を殺すことだから、絶対に繰り返してはいけない。(細川千枝子さんのお世話でこの証言を得ることが出来ました。この場を借りて御礼申し上げます。)

門間香津子さん証言(9歳、市川市中山国民学校3年生、当時千葉県市川市)

私たち家族は、以前、東京都品川区西中延に住んでいた。庭には1畳半の大きさの防空壕があったが、いつも湿気でじめじめしていた。隣組組長宅のコンクリートの壕を利用して貰うこともあった。姉が入園していた暁星学園幼稚園に、私も年度途中から通った。十字架を下げた園長先生の人間を大切にする考えに影響を受けた。軍部は近い将来の東京空襲を想定して、狭い路地を壊して道を拡幅した。火災の延焼や戦車の通路をする方針であった。強制疎開される民家は、新築であっても容赦はなく、ロープで倒される家々は惨めであった。父は、この事態を見て、1945年3月10日の東京大空襲の前に千葉県市川市に

引っ越すことを決断した。家族構成は両親、兄、姉、私、妹、弟 2 人であった。すぐ下の弟（邦夫）は 1943 年 5 歳の時、赤痢で死んだ。

父は早稲田の法科を卒業後堪能な英語を生かしてジャパントイムスに入社後、蝶ネクタイをして出勤していた。父の書斎には仕事で使用するタイプライターがあり兄妹たちにも触れさせなかった。父は高知の士族出身だと自負し、家では行儀作法にきびしく、母は父の帰宅を、三つ指をついて出迎えていた。実母が再婚したため栃木県からお屋敷奉公に来ていた母とはダンスホールで知り合ったと聞く。母は小学校しか出ていなかったが努力家で頭が良かった。

父は結核を患っていたので兵役は免除されていた。市川に引っ越す前にジャパントイムスを辞職していた父は世界の切手や日本の最初の切手などの販売、戦後は日本の企業や商品を英語で紹介する広告会社を設立したが、社員に資金を持ち逃げされ会社は倒産した。その後、仕事は転々としたが、最後は語学を生かして貿易会社で働いていた。酒好きで人に振舞うことが好きな父のもと家は、いつも貧しく母が編物の内職で家計を助けていた。自慢できる父ではなかったが、高浜虚子の門下に入り「白石紅村」の雅号で新聞投句を続け最後の一句は次の一首であった。「誇り高く春宵の道急ぎけり」。

私が市川に引っ越した時、東京者はいじめの対象になった。「おっぺす」とか「ぼっか」などの千葉方言も使ってみたが、父に標準語を話せと怒られた。市川には防空壕を作らなかった。

東京延山国民学校は 2 部授業であった。学校には奉安殿と二宮金次郎像が立っており、いずれも登下校時に最敬礼をした。お正月、天長節(昭和天皇誕生日)、明治節(明治天皇誕生日)などには、校長が奉安殿から、教育勅語を取り出し、うやうやしく礼服に白手袋で紫色の布で被せて演台に乗せた。

東京の中野中学校の寄宿舎にいた私より 4 歳年上の兄は、東京大空襲に遭遇した。寄宿舎の学友は多く犠牲になった。13 歳の兄は、敷布団を被り、3 日間焼け野原の東京を歩いて市川に到着した。途中、野宿をし、炊き出しの食事を受けてきたが、家に着いたときは声がでなかった。兄は記念品になるかのように、焼夷弾筒のフタをポケットから取り出した。家族は連絡の取れなかった息子（兄）が帰ってきたのでホッとしたが、兄は 1 か月位ショックで寝込んでしまった。東京でお世話になった近所の人たちを励ますために母は、野菜など食料品を担いで 1 人で品川を目指した。五反田駅から池上線の荏原中延駅まで線路はまだ復旧しておらず、歩き通したと言う。

姉は、富山県に 1 年半集団疎開をしていたが、市川に越したことで転校の手続きのため夏休みに家に戻っていた。1945 年夏、市川市にも空襲があった。私の家の屋根にも焼夷弾が落ちた。しかし、消し止められたので火災は免れた。住宅地の路地にいたとき、艦載機の機銃掃射を受けた。思わず身を伏せたので

助かった。機銃弾は体の脇を走った。米戦闘機は、私を狙ったように思う。

そして、1985年8月15日は家族全員で終戦を迎えたが、私はその日のことは全く覚えていない。

戦争が終わったのは、夜間の灯火管制がなくなり、空襲警報がなくなったことで体験した。戦後、教育で変化したことは、懲罰のために生徒が板の間に座らせられたことはなくなった、教師による横ビンタもなくなった、天皇を賛美する教科書は墨塗りにあった。しかし、教師や学校は戦争に対する評価を言わなかった。

戦後、1948年に生まれた弟（正晴）は配給の食糧不足が原因して生後4時間で、栄養失調で死んだ。母は動けないので、しっかり者の姉と私が弟を火葬に出した。戦後、姉は隣組集まりで、疎開先で覚えた踊りを披露していた。無い無いづくしの戦後は、隣組で助け合って生き抜いてきた。配給のとうもろこし粉、うどん粉、さつまいもの代用食では足りず川で“ざりがに”を取って食べ、“よめな”、“はこべ”など野草を取って食べた。習志野の農家まで買い出しにも出かけた。

1956年、私は“市川文学サークル”に入会した。そこで戦艦武蔵の生き残りであった作家の渡辺清氏に出会ったことから「戦争」について意識するようになった1956年から1961年迄の“文サ”月二回の例会で読んだ文学書は約100冊余り。千葉市民文学会との合同研究会の作品は、開高健の「裸の王様」だった。渡辺清氏は1982年朝日新聞社から「戦艦武蔵の最後」を発行した。千葉に居住して1995年に反戦川柳作家鶴彬の存在を知り、小中台川柳会に入会戦後60年には会員全員で平和川柳を作句し、その一部が地域新聞中央版2007年10月28日号に掲載された“私の句”は「防空壕暗闇の中息ひそめ」である。

1999年、私が平和委員会に入会した時、七夕空襲を経験した90歳を越える方の証言を取ろうとしてテープレコーダを回したが、話があちこちに飛ぶのでまとめられなかった。このような証言記録活動は戦争を繰り返さないためにも必要だと思う。

戦争はいけない。人と人が殺しあうのはいけない。また、人が理由なく殺すのは許されない。戦争は一般市民まで巻き込まれる。私の家族は戦災死したが、いつもひもじい想いであった。

古家（こいえ）幾久江さん証言（12歳、国民学校6年生、山梨県疎開）

東京・亀戸六丁目で父は鉄工所を経営していた。1933年（昭和8年）私はここで生まれ、近くの天神様で産湯を使ったそう。私が3歳の時父が肺結核で

死亡し、母子家庭になった我が家は北砂町三丁目に転居した。

学齢に達し、私は砂町第一小学校（後に国民学校）に通った。夏休みになると、山梨の母の実家に泊まりがけで遊びに行っていたのだが、1942年（昭和17年）の夏、戦争が激しくなってきたので東京に帰らず、そのまま山梨に疎開することになった。母の実家には母の姉が独り暮らしをしていた。その伯母に世話になりながら、山梨国民学校に通学した。

あの夜の驚き、不安が今でも蘇る。それは忘れもしない1945年（昭和20年）3月10日の夜のことである。伯母に起こされて見た東京の方の空が真っ赤なのだ。これが、午前0時8分に爆撃が開始された東京大空襲だった。翌日、東京は大変なようだと言われ、伯母が誰かから聞いてきて心配そうに語った。

東京には母（47歳）、姉（22歳）、長兄（20歳）、次兄（16歳）の四人がいる。母も姉も二人の兄も、家の近くの軍需工場で徴用工として働いていた。

母は、姉は、兄は無事だろうか。心配な私は三日後に甥（母の実家の跡取り息子で30歳）に連れられ、貨物列車に乗り山梨から東京へ行った。

一面の焼け野原、我が家の近くに、子どもたちが名づけた「汽車会社」の建物があるはず。そこを目印に歩いた。どの家も屋根も柱も焼け尽きていた。傾いた電柱の電線に何やらぶらさがっていた。人間の手や足や首なのだ。爆風で飛ばされてきたのだろうか。一瞬、ぶらりと下がった首の目がギョロリと動いたように見えた。私は思わず悲鳴を上げた。甥が、「上を見るな」と言った。甥も私もうつむいて歩いた。

我が家の前に辿り着いた。跡形もなかった。爆弾の直撃を受けたのだろう。深さ3～4メートル、直径15メートルほどのすり鉢状の穴がぽっかりあいていた。爆弾は我が家をねらったかのように母屋の真上に落ちてきたようだ。母が使っていた鉄瓶と鉄製の裁縫箱が穴の淵に土まみれで見つかった。それだけがここが我が家の跡だと確認できる証拠だった。

母たちの消息は、その日にはつかめなかった。数日後、隣に住んでいた方に会い、母のことを聞くことができた。母が猛火の中、「熱いよ、熱いよ」と言いながら逃げ回っていたのを見たという。そのうち転んでしまったが、声をかけてあげるさえできなかったという。その後母はどこへ行ったのだろうか。下町は川の多いところだから、水を求めて川の方に行ったのかも知れないとも考えた。見つからない。長兄は、空襲の直前に赤紙が来ていて、千葉県のだこかの部隊に3月21日に入営することになっていたというから母と一緒に住んでいたはずだ。やはり見つからない。次兄も、姉もみつからない。何の手がかりもつかめず、私たちは疲れ切ってしまった。

空襲の夜から一週間ほどして、次兄が火傷だらけの、ぐるぐる巻きの包帯姿で山梨に辿り着いた。空襲の夜は、体が熱くて、熱くて、水もなく、土を掘れ

ばいくらかひんやりするので、そんなふうにして体を冷ましながらさまよったという。3日か4日どこかの防空壕のようなところにおいて、ようやく山梨まで来たとのことだった。この兄は、その後病院に入院、25年間入院したままで死んでしまった。

悲惨な東京大空襲のあとも、戦争はまだ続いており、7月6日夜から7日にかけて山梨県甲府が空襲にあった。米軍機は帰りがけに私の住む集落にも焼夷弾をばらまいていった。私は親戚の子の守りをしていたのだが、急いで竹藪に作ってあった防空壕に駆けこんだ。ところがその防空壕にも焼夷弾が直撃、とっさに防空壕の外に逃げ出して私は、いったんは難を逃れた。しかし、焼夷弾は落ちた後が恐ろしい。炎が飛び散るのだ。私は子どもをおんぶしていた。その子は全く無事だったが、私は肩から手首にかけて炎を浴び大火傷をしてしまった。未だにその傷は人に見られたくないほど醜く残っている。花火や閉所がこわいのはその時のショックからだろう。

空襲の後しばらくして、いろいろな事情から私は母の実家を出た。その後は、いとこ・はとこの家を5カ所ほど転々とし、お世話になる先の子や近所の子の守りをすることで食べさせてもらった。洗濯、掃除、ご飯焚きなどの家事をいろいろした。寝る時間は4~5時間という日が多かった。無給だった。

中学校にはほとんど登校できななかったが、代用教員だという若い女のやさしい先生がいたことを覚えている。その先生は死んだ母の話をすると一緒に泣いてくれた。私は、どのようにして手に入れたのだろう漢和辞典を持っていた。その辞書を見て言葉や漢字を身につけた。

19歳頃、北海道の小樽の親戚の病院で看護婦見習いのようなことをしたが、包帯の洗濯ばかりさせられ、辛くて逃げ出してしまった。

人並みに給料をもらえたのは、築地の「治作」へ勤めてからだ。1964年まで働き31歳で結婚した。1966年に千葉市中央(現中央区)に引っ越し「ほてい家」で働いた。ウェートレス、結婚式の嫁さん係、高校生の洋食マナーの指導など、やり甲斐のある仕事も任されるようになった。生活もようやく安定してきた。やがて女の子を授かり、親子で暮らす幸せをしみじみと味わうことができた。

娘は成人して嫁ぎ、夫に先立たれたので私はいま一人暮らしである。幸い健康な私は今、千葉市稲毛区の北部診療所でデイケアの仕事をしている。そしてかたわら、「東京大空襲被害賠償訴訟」の原告団に2008年から加わって活動している。空襲によって家族を失い、亡くなった者の遺骨さえ抱くことのできない私たちに一言の謝罪もないし、慰霊碑を建てようもしない国や東京都を許せないのだ。間もなく喜寿を迎える私は、この裁判闘争を勝利して、戦争のない世の中を実現させたいと心から願っている。

(編集委員注)

証言者は、3歳の時に父を失い、12歳の時、空襲で家族4人を失い、遺骨すら発見できなかった。両親、家族がいなければ、義務教育すら満足に受けられず、まともな就職もできない日本の社会に生きた方である。証言者が、政府が起こした戦争にもかかわらず、謝罪もせず、補償もしない政府に対して、亡くなった家族の悔しさを晴らすために、再び戦争を繰り返さないために活動されている。

熊谷富美子さん証言（14歳、高等女学校3年生、東京都豊島区）

私是一九三一年生まれ、八人姉妹の末っ子として育った。東京、巣鴨の山手線の近くに住み可愛がられて育ったと思っている。ところが六歳の時、湿性肋膜炎になり、近所の医者が太い注射針を背中にさし水を抜いたのを覚えている。朝からお刺身でないとご飯を食べないと母に上等のお刺身を買ってきて貰って食べていた。そのせいで三〇歳ぐらいまでお刺身は食べなくなかった。毎日あまり食べていたので食傷気味であった。ただ、薬もない時代、栄養になったと思っている。それでも無事治って仰高西国民学校には普通に入学できて、その後大きな病気をすることなく過ごした。

一九四三年六年生の時、卒業旅行は京都、奈良となっていたのに、何と日帰りで多摩御陵（大正天皇御陵）参拝となった。戦後、この頃から戦況が悪化していたと分かった。

私の父は植木屋で、木を育てて売る仕事であり裕福ではなかった。それでも姉妹達はサラリーマンになって私が大きくなる頃は、ゆとりが出来ていた。四姉が私立の女学校だったので、私は、費用の安い都立に入らなければと考え、先生には一寸無理だと云われたが「絶対に入らねば」と決意した。希望の東京都立第10高等女学校は体育が盛んだった。当時は軍国主義の時代で当然であった。放課後、懸垂、平均台等練習して何とか入学できた。ところが勉強が難しく国語、修身、歴史、地理すべての教科書が知らない字ばかりで1ヶ月位まさに落ちこぼれの状態であった。私は悩んだ末、もう少しやさしい学校に転校した方がよいかと小学校の先生に相談した。先生は入学出来たのだから予習復習を毎日ばっちりやりなさいと励ましてくれた。一念発揮、猛勉強し一学期は何とか上位の方の成績を得られた。気が楽になり自信も少しついて楽しい一年生の生活だった。

それが二年生の時戦局が厳しくなって、二学期から三か所に分かれて勤労働

員が実施された。

私は板橋のガスタンクの近くの化学工場に、十五人位の生徒と一緒にいった。仕事は、防毒マスクの口のところに当たる、使用した脱脂綿の再生という仕事だった。二米四方位の大きなブリキを張ったテーブルの上に、ものすごい臭気の脱脂綿の固まったものを、薄く剥がすことだった。手袋はしたと思うが、マスクはしていなかったと思う。その頃毒ガスは各国とも使用禁止の筈が何故ここに使用したのがあるのか？と不思議に思ったが、当時そんな事を口に出来る状況ではなかった。間もなく学年主任の化学の先生が見廻りに見えて、作業環境が劣悪であることに驚かれた様子で、それから暫くしてその工場行きは中止になった。凡そ二、三週間位だったかと思っている。このことは今でも残る疑問だ。しかし、そこをやめることになってよかった。

その後は学校工場と云って学校の空き教室を使つての、海軍水路部の仕事だった。人員は十五人位だった。疎開できる人はどんどん田舎に行つたが、田舎が無しの私は残つた。仕事は、惑星の火星、水星、木星、金星、土星の運行を、地上の何処の地点から艦船や飛行機が観測した時、天空の東経何度北緯何度の位置に星があるのかを決定する資料を作成することであつた。既に大まかには表示されているものを、もっと細かく割り出す仕事だった。惑星の担当を決め日毎に割り出しを行つた。簡単なことだった。日毎に作られている表を時間ごとに割り出して、特殊な方眼紙に緯度を上に経度を下に数字で書いてゆく作業である。ほとんど動かない惑星はずっと同じ数字が続き、動きが大きい惑星は1日の間に数字が動いてゆくのである。当校卒業の水路部の事務員二人が監督し、海軍少尉が月一回見廻りに来た。

我が家では、一年生の終り頃の三月初め母が二ヶ月位患つて亡くなつた。五五歳だった。母は、子どもを8人も産み育てたので、年より老けていたが、非常に優しく、末子の私は特に可愛がられたと思う。母は「素直で、正直な人になれ」と言うのが教えだった。

私は上に姉達や、兄嫁もいたからそう変化もなく生活できた。その三月末に三一歳の長兄に召集令状が来て、兄は海軍の千葉県木更津基地で、暗号兵となつた。三番目の兄は二十歳で、兵役で近衛兵となつて、皇居の護衛に当たつていた。二番目の兄は、既に中支（現在の中国中央部）に出征していた。その兄は、一九四二年頃、肋膜炎となり大阪の病院で入院治療、治つて帰還したが、半年位して秘密召集で近所にも内密で、六本木の陸軍の連隊に行つたが、程なく福岡の消印で、何ということのない文が10行ある中に「どうも南方らしい」と言う短い文が滑り込ませてあつた。それは、帰国後、沿道の見送りの人に、そつと「ポストに入れて」と頼んだものと分かつた。その後は何の連絡もなかつた。

私は女学校二年の終り、一九四五年三月十日に下町の B29 の 100 機よる東京大空襲があった。山手線巣鴨駅近くの家から、南の空が赤黒くなって翌日も無気味な位だった。山手線の内側南半分と東側（港区、千代田区、中央区、台東区、江東区あたり）一帯に爆弾と焼夷弾が落とされ、一晩で焼き尽くされた地域は余りにも広範囲だった。大勢亡くなっただらしいと云われていた。間もなく、山手線の両側は防火地帯にするからと強制疎開で、三月末まで二週間で引っ越せとのお達しが豊島区役所（と思う）から来た。父が西武線沿線の東長崎の方面で、空き家を見つけ、父と女姉妹と私四人とで、リヤカーや荷車を引いたり、押したりしながら、五km位を歩いて往復引っ越した。ブツブツ云いながら引っ越したのだが、その後二週間位で四月十三日の大空襲で、今度は山の手の方全体が焼きつくされた。私の小学校の友達も染井の墓地（二km位離れたところ）に逃げ命は、助かったという。彼女は長野の方へ移った。東長崎でもその後何度のもというより、昼夜の別なく空襲があり、眠くてたまらなかった。B29の低空飛行で焼夷弾が落とされ、風向きでこちらへ、焼夷弾が落ちれば逃げなければと防空壕から見ていた。焼夷弾は比較的軽いので風向によって流されることがあった。焼夷弾は長さ一五〇cm位の細長い円筒形で一〇本位束ねたものが落とされ、途中で一本一本に別れると同時に、先に火がついてヒュルヒュルヒュルと音を立てて落ち、屋根に当たるとパッ！と燃え広がった。幸い我が家が焼かれることはなかった。

その頃、女学校一年生は集団疎開、二年生は個人疎開で、疎開できない人は学校で自習していたようだ。三年の私たちは三ヶ所に分かれ、成増の航空研究所、二ヶ所目は陸軍被服廠の仕事で肩章に刺繍する作業を学校の教室で、10人位でやった。私は水路部の仕事で学校に行っていた。四年、五年生は工場の方に行っていたようだ。

一方昼間学校で水路部の仕事をしていても警戒警報が鳴ると資料を非常持出袋に入れ、かかえて学校から十分位離れた神社の脇の大きな横穴の防空壕に入った。解除になるまでその中で一、二時間過ごした。当時着ているものは、母の着物を解いてもんぺと上着であった。綿の入った防空頭布を肩にかけ、一方は布袋を掛けていた。中身は非常食（大豆の煎ったもの、煎り米、乾パン等）に水筒、三角布、簡単な薬、手拭、はな紙等だった。しかし六月頃から日が経つにつれ、警戒警報が鳴らない日はない位になり、いきなり空襲警報が鳴るようになり、空襲警報が鳴ると同時にもう敵機が編隊で見えるようになってしまった。校庭の脇に小さい防空壕がいくつか作られ、そこに入るようになった。校長先生が校長室から大声で「早くしろ！」と何度も怒鳴られた。疎開出来る人はどんどん行って、残った人数は七、八人位になった。私はずっと東京で頑張った。夜も昼もの空襲で疲れ果てていた。そして 1945 年八月十五日を迎えた。

この日は天気は、一点の曇りのない真っ青な空であった。

十二時に校長室の前のテラスの芝生に座って玉音放送を聞いた。終り頃、日本が負けたと分かって皆で泣いた。夜家で電燈の傘の覆いを外して、明るいところで夕食が出来て始めて、「ああ戦争は終わったんだ」と実感した。戦争に負けたので進駐してくる米軍に軍の書類を見せてはいけないということで、翌日、校庭の真ん中で星の計算表を皆焼いた。丁度一年先まで出来ていた。空襲の中で必死にやったのにと涙があふれて仕方がなかった。初めて日本が戦争に負けたので、今後どなるか非常に不安であった。

戦後、二学期が始まり、疎開していた人がぼつぼつと戻ってきて賑やかになった。

ところが疎開していた人は、場所により動員先がなく授業を受けていた人がかなりいて、学力に差があって、又私は必死で勉強することとなった。その頃よく停電になった。試験勉強の時など、近所の友達と停電になったら交互の家でと約束し、一本のロウソクで勉強した。

終戦の翌年、1946年9月頃次兄が突然帰還した。巣鴨の家に行ったら、焼けていたので、長兄の嫁の実家（農家）が西武線の江古田にあり、そこへ行った。兄嫁の父が荷車に次兄を乗せて東長崎の家まで連れて来てくれた。15分の距離である。次兄は家に着くなり、マラリヤを発症し40度くらいの高熱を出したが、持たされていたキニーネをすぐに飲ませたので回復した。私が学校から帰ったら布団を何枚もかけて寝ていたが、回復に向かう姿を見て凄く嬉しかった。その後、マラリヤを再発していない。ベトナムにいたが、戦争は余りなく、占領統治をしていて、住民とはうまくいっていたらしい。終戦後は、捕虜になったがひどい待遇を受けず、帰国を待ったという。

四年生の六月頃、食糧不足で食卓には、じゃが芋が手に入れば、茹でたじゃが芋だけ、かぼちゃならかぼちゃだけ、又その後はさつま芋の蔓(ツル)を茹でて五糎位に切ったものだけが連日となった時は、いよいよ飢えて死ぬかと思った。その頃、学校も暫く休校になった。生徒集会が初めて開かれ、食べるものがなく空腹で学校に来られないと続々と涙ながらの発言があり、6月半ばから10日間休校になった。直後、アメリカからの小麦粉が配給になり、うどんを作ったり、すいとん、パン（新聞掲載の作り方を見て）が食べられたりするようになって生き延びたと思った。終戦後、長兄と三兄は、8月終わり頃帰り、復職した。

長姉は、1938年3月、陸軍軍属の人（甲府市出身）と結婚したが、すぐに満州に行き、ハルピンや牡丹江にいた。終戦の翌年1946年8月帰国したとの知らせで、三兄と夏休み中の私が甲府の実家に会いに行った。帰ってくるなり男子を出産して寝ていたが、元気だった。洗濯して、干して日帰りした。大きなお腹で二人の子ども連れの帰国はさぞかし大変だっただろうと思った。

四年生の頃、課外でピアノの先生が来ることになり、その頃私は小学校の先生志望でピアノ位弾けるようになりたいと、父が授業料を出してくれるとのことで、レッスンを受けることになった。家にはピアノはないので、学校の三台で習いたい人達で割当を決めて練習した。考えてみれば、その頃食糧難で大変な時であったが、ピアノを弾いている間はすべて忘れて楽しい時間であった。

私は、教師になる為に大学へ行く心算でいたが、一九四八年はまだ戦後時代で落ち着いていなかった。我が家も長兄と四姉が失業していて進学は無理と断念した。

私は、女学校 5 年生でも、実際は 3 年位しか勉強しておらず、戦争の惨めさをいやと言う程実感し、戦争は何があっても絶対にしてはならないと強く強く思っている。

「戦争を語る銃後の乙女達」

小林多喜子さん証言（9 歳、芳林国民小学校 3 年生、東京都文京区神田）

私の家は神田大明神の下にあった。家業は東大生を相手にした飲食店であった。父母が、協力して育てた店は「たぬき屋」という名で、東大生には人気があった。父が、出征したのは、1943 年であった。町内で、出征する人が 4・5 人いたので、合同で出征式が行われた。父は、戦闘帽、ゲートル姿に出征の白いタスキをかけてみんなの前で挨拶したが、内容は覚えていない。万歳三唱がなされた。母がどんな気持ちかも知らないでいた。

その後、面会の日が来たので、母と私、弟が父に面会した。この時も、父母がどんな会話をしたのか、父が子どもに何と言い残したのか記憶がない。父は、「支那」（現在の中国）に派遣された。父から軍事郵便は届かなかった。父は、何時も笑顔の人であったが、軍隊に入ると、この笑顔が上官のビンタを誘ったらしい。

残された家族は、母、長女の私、妹 2 人、弟 2 人の 6 人であった。終戦の年の東京大空襲の頃は、「たぬき屋」は閉店していた。

空襲が予想されていたので、家には店の大事な原材料（あずき豆、砂糖等）を格納する地下壕が掘られていた。町内会の人達は、神田の明神さんのところに掘った共同の防空壕（8 畳の広さ、約 20 人収容できた）を使っていた。空襲警報が発令されるといつも防空壕へ逃げたが、だんだんマンネリになって来た。夜間の空襲警報が続くと子どもは眠くて仕方がない。私も避難の時に持って逃げるリュックを枕と間違えて持っていたことがある。1944 年 12 月 31 日からお正月にかけての空襲は、防空壕に入らず焼夷弾が落ちてくるのを見て、花火のように綺麗だと思った。

しかし、1945年3月9日の焼夷弾による空襲は、大規模なものであった。辺りは火の海であった。町内の防空壕では間に合わないことはわかった。芳林国民小学校の鉄筋コンクリート製校舎を目指した。この学校には、木造の講堂もあったが、燃えない校舎に避難したい人で校舎は一杯になった。これ以上の避難者を入れないために鉄製の学校正門が閉められた。校舎の内部は火の子や熱旋風は防げたが気温はどんどん上昇した。そこで、学校の25mプールの水をバケツリレーで汲み、校舎に散水して冷却させた。プールの水も「煮え湯」状態で、80度Cの水温であった。喉の渇きは深刻であったが、プールの水は飲まなかった。

翌朝、空襲が一段落して、校門を開けると、門の前に20-30人の焼死体が門に向かって横たわっていた。黒焦げではないので、死体の性別はわかった。校舎に避難したい人を全部収容することはできたかもしれないが、門を閉め、扉を閉めて内部を守らなければ共倒れになったかも知れない。家に戻ったが、我が家は完全に焼失していた。隣の小鳥やの主人は自分の防空壕で座ったまま死んでいた。家も小鳥も燃え尽きた。

この空襲で、深川にいた祖父母は焼け出され、避難したが、熱風から身を守る適当な場所を見いだせず隅田川脇で死んだ。母方の兄弟で20歳代の若者3人が火と熱の旋風で死んだ。隅田川の水も煮え湯であったと言われる。外傷がない犠牲者は熱と乾燥と酸素不足が原因であろう。

空襲に遭った其の日は本郷小学校に行き、4・5日泊まった。そして家族は父方の田舎、新潟県刈羽郡鯖石村山室の叔父の家を訪ねることにした。上野駅で列車に乗った車中は身動きできない混みようで、8時間以上かかり目的の新潟県の安田駅に夜着いた。降りた駅から向かう叔父の家へは、雪が深く道の両端は身の丈以上の雪でびっくりしながら歩き、やっと着いた。その年の5月には大雪の関係で鯖石川は雪解け水で洪水となって氾濫し、借りた家は洪水で流されてしまった。母は、隣村の田島に小さな家を購入して移り住んだ。

1945年8月15日、重大放送があるので、南鯖石小学校に集められた。校庭に生徒約100人、職員約10人がラジオに聞き入った。しかし、雑音が多く、天皇が分かりにくい言葉で話すから、生徒は理解できなかった。校長は「これで戦争はおわった」と説明した。そのあと、校長は「アメリカ軍が上陸するとどうなるかわからない」と付け加えた。校長も不安だっただろうが、これが、不安材料として村中に広がった。私は「これで東京に帰れる」と考えたが、東京には帰る家は焼失していた。母は私たちに「いつ帰るかわからないが、父は必ず帰ってくる」と希望を持たせた。

母は商売で稼いだお金を大事にして、当面の生活には困らないと思っていたらしいが戦後の幣価切り下げがあったので、持ち金は二束三文となり、やむな

く村の土方仕事で生活費を稼いだ。

やがて、父は1947年2月に帰国した。父は、焼け跡の姿を変えた神田を歩いて、我が家の防空壕を見つけたが、私たちはすでに疎開していた。近所の人が父を見つけて疎開先を教えた。

1947年3月に父が新潟県を訪ねて来たが、親子の対面は劇的なものではなかった。子どもは、父親を見てキョトンとしていた。母も夫との再会を喜んだが、5歳の弟を栄養失調で死なせた責任を感じていた。疎開生活では子どもに十分な食事を与えることが出来なかった。タクワン1本で家族が1日を暮らしたこともあった。やがて、叔父たちが復員して来たが、東京深川区で飲食店を再開したいと言う話が出て、母は「たぬき屋」の暖簾をあげた。この「暖簾効果」で叔父たちは大成功したが、両親はついに飲食店を再開しなかった。

父は新潟県の電気化学工業(株)青海工場(現在は糸魚川市)に単身で就職した。この工場はすぐ近くの山(黒姫山)の石灰石を原料とする化学工場で、父の仕事はこの石を採掘・精製する仕事である。やがて、私と妹は父の借りた社宅(6軒長屋)で生活をし、その後母たちが合流してやっと家族と一緒に暮せた。助け合いは本当によく、今でも懐かしく感じている。

東京の大空襲(小学校3年生)の体験から、私は、戦争は絶対に反対である。戦争はするべきでない、戦争は人間を傷つける。しかし、今の世の中でも戦争は絶え間なく起きているし、この戦争で太る人もいるらしいが、絶対に許せないことと思う。

田中洋子さん証言(5歳、東京都北区赤羽)

私は、終戦当時5歳なので、戦争と言う記憶が十分でない。しかし、父が戦死をしたと言うことは我が家にとって極めて重大な出来事であった。今まで、豊かで苦労がなく、生活していたのが、戦争によって生活が一変した。

終戦間近まで一緒に暮らしていた家族は、母、長兄、私の3人であった。このほかに姉と次兄がいたが、二人は疎開していた。次兄は、両親の出身地茨城県小川町の叔母の家に縁故疎開していた。姉は、3年生であったが、長兄が6年生で集団疎開するので、一緒に群馬県の榛名山に疎開していた。長兄は国民学校が終わったので先に東京に帰っていた。このように戦争によって家族は、全くバラバラにさせられていた。

家は、都電の赤羽・三輪線の志茂5丁目停留所近くの都電通りだった。そばには、隣近所の共用防空壕があったが、空襲警報になると、ここから荒川の土手まで、約10分歩いて避難した。長兄は、空襲警報の度に、家財道具を積んだ

リヤカーを引いて荒川の土手に避難した。赤羽に何度も空襲があったのは、周辺に軍隊の基地がたくさんあり、集中的に攻撃されたからである。

父は、三菱銀行の前身の銀行員であったが、1941年に召集され、1945年8月15日に戦死通知が届いた。父は、その時41歳の若さであった。戦死の通知とともに木の箱が届けられた。私は中身を見ていないが、遺骨が入っていなかったと聞いた。私が、1歳の時に召集されたので、私は父の顔は写真でしか分からず、もちろんぬくもりも知らない。だから、大切な父が戦死したことを実感できなかった。しかし、母は悲しく、悔しかったに違いない。母は、夫の戦死を信じられず、祈祷師に頼んで父の戦死は本当かどうかを聞いたりもした。

数十年経って、姉は戦争によって父が殺された場所を調べ、靖国神社より、次のような回答が来た。

1. 階級 陸軍伍長
2. 所属部隊 第2野戦築城隊
3. 死没年月日 昭和20年8月15日(1945年)
4. 死没場所 満州牡丹江麻刀石

姉は、2008年、当時の満州の牡丹江(注)に確かめに行った。死没場所の麻刀石(マトウセキ)は牡丹江駅より二つ先で、1945年8月13-14日に大きな戦いがあり、その時に大勢の兵隊が死んだと聞かされた。

私は、終戦の放送はわからない。戦後、姉は疎開先から戻り、次兄は、叔母の家で決して楽な生活をしていなかったが、空襲から逃れるために行き、小学校を卒業してから、家に戻った。ようやく父を除く家族が同じ家に住むことが出来た。

その後母は、生活費を稼ぐために、全日自労の日雇い労働者になった。朝が早く、帰りが早いので、子育てが出来る仕事を選んだ。

全日自労の仲間は、レッドパージで解雇された労働者も多くいたため、彼らと初めてメーデーに参加した(1952年血のメーデー事件)。

警察はメーデー参加者を検挙するために捜索を開始した。ある夜、私と母が銭湯から戻ると、警察が張り込んでいた。母は、その日は逃げたが、私たちが学校に行っている間に、赤羽署に連行された。すぐ、釈放された。

母は、私たちが銀行に就職させようとしたが、父親がない(母子家庭)と言うことで差別をされ銀行に就職できなかった。姉は、日本電信電話公社(後にNTT)市外電話局勤めていて、労働組合活動や平和活動をしていた。姉も私も、平和を願い戦争に反対する戦没者遺族の会(平和遺族会)に加入している。

私は、終戦の翌年、北区立岩淵小学校、続いて岩淵中学校に入学、元気なスポーツ(バレーボール)好きな女子であった。区立で優勝して東京都の大会にも出た。都立北薊高校に入学、そこでもバレーボールをしていた。

母子家庭と言うことで知り合いの紹介で中小企業に就職した。やがて、労働組合が結成された。うたごえや平和運動にも参加して、社会運動を理解するようになった。結婚後、千葉市花園に移転して平和運動や婦人運動に参加して来た。現在は、千葉県母親連絡会の役員を勤めている。

1955年、第1回世界母親連絡会がスイスで開催（第1回のみ）された時、第1回日本母親大会を開催して代表を選出した。福岡県から炭鉱の女性が1円カンパで参加費を集め、三日目最後の日に到着して、炭鉱生活者の苦しさを涙で訴えた（涙の大会）。「いのちを生み出す母親はいのちを育て守ることを望みます」のスローガンのもと、半世紀以上続けている（今年は第55回大会）。

私も、若い父を戦争で命を奪われ、戦争によって生活が一変し、家族がバラバラにさせられた。こんな戦争や政治を許すことはできないが、私の活動の原点である。子どもや孫に、私のような苦しみを二度と起きないようにと頑張っている。

榎本和助さん証言（18歳、国鉄職員、東京都中野区）

家族構成は父母と兄、私、弟2人、妹5人で、11人家族であった。父は大工であった。私が14歳で鉄道学校に通っていた年の1941年（昭和16年）12月8日、戦争が始まった。大本営から発表されるラジオ放送は大戦果ばかりで、真珠湾攻撃やマレー半島攻撃の戦果は素晴らしいもので、当時の国民は皆、有頂天になっていた。シンガポールを攻撃して占領したときは、提灯行列が出たりして帝国陸海軍の強さを知り「万歳、万歳」の声が満ちあふれていた。新聞は連日勝利の記事で埋め尽くされ、ラジオはひっきりなしに勝利のニュースを流し、そしてそのあと勇ましい軍艦マーチが鳴り響いていた。

しかし、国内では物資が不足し出してきており、配給制度が始まり物価も上がり始めた。また、兵隊に召集されて出て行く若者の姿が多くなり、それを見送る町会の人達が旗を持

ち日の丸の小旗を振って町を行進してゆく姿が多くなった。「天に代わりて不義を討つ、忠勇無双のわが兵は、歓呼の声に送られて今ぞいでたつ父母の国、勝たずば生きて還（かえ）らじと、誓う心の勇ましき」この歌を歌いながら小旗を振って戦地に赴く若者を勇気づけたものだ。一家を支える大黒柱の夫や、結婚したばかりの若者が召集令状一枚で生死の分からぬ戦場に駆り出されるのだから不安が一杯だったろうと思う。

この頃からしばらくして銃後という言葉が流れ、銃後の守りとして防空訓練や銃剣術の訓練が始まったが、まだそれ程の緊迫感はなかった。この頃の教育

といえばほとんどが暗唱するだけで、教育勅語、軍人勅諭、歴代天皇の名前など便所の中などで一生懸命暗記したものである。

私は 15 歳の年に国鉄中央線の阿佐ヶ谷駅に就職したが、駅の若者が召集されてゆくため人手不足になり、15 歳の子供でも出札係で採用するようになったようだ。当時の月給は 35 円で勤務は徹夜、非番、徹夜、非番の連続で一日丸々休みは、春と秋の靖国神社の例大祭の日だけの二日しかなかった。そして、非番の日は全線乗り放題の国鉄パスがあったのであちこちと買い出しに出掛けていた。兄弟が 9 人と多いので配給では足りず、米や野菜、果物、塩、果ては木炭などもよく買い出しに行ったものだ。

そして、勤務のかたわらには軍事訓練をさせられ、とがった竹槍を麦わらで作った敵兵の人形目掛けて「イヤーツ」と力を込めて突いたものだ。しかし、これで果たして勝てるのだろうかといつも疑問を持っていた。体力を強めるためと称して 10km 程の距離を、軍歌を歌いながら徒歩の行軍をしたり、30kg 俵を担いだり、鉄棒を上ったりさせられたものだ。駅の男性職員は兵隊にとられるため徐々に茨城や千葉、埼玉出身の女の子に代わり、計算が合わないと泣いたりして困ったことが多かった。歳下の私はこのお姉さんたちを励ましたりして疲れた。

しかし、まだ 1942-1943 年（昭和 17~18 年）頃迄は戦時下でありながら国内ではあまり緊迫感は感じられなかった。警戒警報という一分間のサイレンになるが、またかという感じで心のゆとりがあった。ただ夜の警戒警報が鳴ると明かりが外に漏れないように電灯に黒い布を掛けたり、ガラス窓には和紙で縦横に張り付けたりして飛散しないようになどと警防団のおじさんが目を光らして一軒ずつ見回っていたものだ。防火演習はバケツリレーや竹の先に縄を濡らして垂らして火消しすることなどが主体だった。しかし、この訓練には必ず参加しなければならず、赤ん坊をおんぶしてやっている人をよく見掛けた。

出征する人には千人針を持たせると効果があるとのことが広まり、手ぬぐいに赤い糸で歳の数だけ、丸く瘤をつくることを母はよくやっていた。特に寅年の人は、千里行って千里帰るとの言い伝えがあったらしく、寅年の母（明治 36 年生まれ）はいつも頼まれていた。しかし、千人針を持たせたこの人達は無事に帰還した人は何人いただろうか。我が家は私より 2 歳上の兄が兵隊検査を受けにいった時は、丁度肋膜炎を患っていたらしく、不合格になり兄は沈んでいたが、もし、行っていたら名もなき南方の島で多分戦死していたかもしれない。私の年齢はまだ若かったが、徴兵年齢を引き下げるといふ噂が流れだし、いずれは兵隊に行くことになるのかと覚悟を決めていた。

町の中は戦争が激しくなるにつれて、「米・英撃滅、火の用心」とか、「欲しがりません勝までは」、「パーマネントはやめましょう」とか、「死んで靖国神社

で会おう」とか暗い切ない標語があふれだした。また、火災の延焼を防ぐため建物の強制取り壊しも始まり、有無を言わせずどんどん取り壊されていった。

疎開も始まり学校がそっくり疎開する学童疎開から、親戚に身を寄せる縁故疎開もどんどん進められた。我が家では二女、三女を静岡県の静波と言う海岸近くの親戚に預けたが、「帰りたい」と毎日泣くので、一か月程いて帰ってきたが、その後戦火が激しくなるにつれ、再び長野県の岡谷のお寺に集団疎開をせざるを得なかった。面会には2度ほど行ったが、「早く帰りたい」と涙をこぼし、別れる時はいつまでもいつまでも手を振り「お兄いちゃーん」と叫び続けた姿が今でも目に浮かぶ。空襲にさらされそうな東京で我々はいつ戦火で倒れるかわからず、これが今生の別れになるかも知れぬと思うと涙が止まらずとても辛かった。

またこの頃は、洋服や靴を買うのに新品の品物は売っていないので古着や古靴で我慢したものだ。駅では軍事輸送を優先するため、列車区間行きの切符の枚数は制限され、小荷物も一日の受付個数を減らされてしまった。それから駅員から志願して予科練に入隊した同僚が休暇で駅に遊びに来た時に、白の七つボタンの制服で敬礼した時は「かっこいいなあ」の声が満ち、「俺も志願してゆくな」という仲間も居たことも事実だ。しかし、この友達の話は、その後戦地に向かったのか、ぼったり途絶えてしまった。

1944年(昭和19年)頃から空襲が多くなり、緊迫の度合いが高まってきた。最初警戒警報が鳴りそのうちに解除となることが多いが、たまには空襲警報が発令され投下された爆弾の音が聞こえるようになってきて、緊迫感が感じられるようになった。空襲警報の後に「退避」の号令がかかると勤務中は駅の備え付けの4畳半ぐらいの防空壕に入って解除まで待つが、たまにはB29の編隊がこちらを目がけて進んでくる時がある。その時は「どうか落とさないでくれ、ほかへ行ってくれ」と祈るばかりだった。空襲は爆弾を落とす時もある、焼夷弾をばらまく時もある。こんなこともあった。昼間の空襲で敵機が過ぎ去った頃を見計らって、壕から出た途端にブスッと異様な音がした。後でそこを掘って見たら縦40センチ、幅5センチ、厚さ1センチぐらいのギザギザの高射砲の破片であった。あと、50センチ狂えば脳天に突き刺さっていたかと息うとゾツとした。また、戦局がさらに激しくなった時は新宿方面から立川方面の中央線に、航空母艦艦載機のグラマン10数機が物凄い音をたてながら機銃掃射をしながら飛んで来た。咄嗟に阿佐ヶ谷駅ホーム下の側溝に身を伏せたが、後で見たら駅のスレート屋根は穴だらけだし、アスファルト床のホームの柱には銃弾が突き刺さっていた。その後、立川行きの電車の屋根をめがけて機銃掃射をしていた。後で聞いたが、電車の乗客には怪我人が何人か出たかわからない。しかし、この時の低空飛行した10数機の爆音と機銃掃射の物凄い破裂音は今で

も脳裏に焼きついて離れない。

空襲は段々激しくなるばかりで 1945 年 (20 年) 3 月 10 日には、下町の下谷、江東地区が B29 の大編隊に夕方から爆撃され何万人の方がなくなりましたが、この時はたまたま駅に勤務していて目撃した。物凄い爆撃の音と猛火が一晩中鳴り響き、東の空 (下町方面) は真っ赤になっており、メラメラと燃える炎が雲に移って異様な雰囲気だった。これを見て仲間たちは「これは凄い、恐ろしい、東京はどうなってしまうのか」と恐怖に包まれた。翌日、火災現場から命からがら逃げてこられた人達が、無事だった杉並区などの親戚を訪ねて煤こけた顔をして電車から降りる人が大勢いた。皆、黙々と歩き焼け焦げた服を着て疲れきった顔をしていたのが忘れられない。

そして、いよいよ中野区に住んでいた我が家がこの恐ろしい大空襲を受ける時が巡ってきた。あれは忘れもしない 1945 年 (昭和 20 年) の 4 月 25 日の夜半からで爆撃機が数百機の大編隊で轟音を轟かせて西の空からやってきた。最初は爆弾でドッカーンと凄い音の後、焼夷弾がパラパラと辺り一面に落ちてくる。落ちた弾は物凄い炎をまき散らし瞬く間に一面は火の海になる。最初は日頃訓練したバケツリレーしたがバケツ同士がぶつかって火のそばに着く頃は、ほとんど水はない。それよりもあの轟々とうなるような猛火にバケツの水をかけても何の役にもたたない。火の粉が降りかかって来るし、物凄い熱をおびた風が吹きまくっている。着ている服が燃えだすので防火用水の水を頭からかぶってもすぐ乾いてしまう。そこへ上昇気流に乗った台風並みの猛烈な風に火が飛び散り、まるで体験もしたことのない地獄の炎で、手の施しようもなく、ただ呆然と安全な場所に逃げるのみであった。私は 5 歳の妹を自転車の後ろに乗せ、少しでも安全な場所を探したが、ちょうど鉄筋のビルが火を防いでくれたので、200 人ぐらいの人と焼かれずにすんだ。まだ焼けてない家の人「誰か来て、火を消すのを助けてくれ。助けてくれないのか、この非国民野郎！」と必死に叫んでいたが、呆然自失の私は、手伝う気にはなれなかった。しかし、この空き地がたまたま燃えなかったので我々は焼かれずにすんだが、もしここに火の手が回り火災を起こしていたら他に逃げる所はなく、我々は全員焼け死んでいたかもしれない。

この空き地に逃げ込んだ人はみな無事を喜びあったものだ。明け方になって我が家の家族を調べたら 12 歳と 3 歳の妹二人がいない。どこへ逃げたのか、探しにゆくにも辺り一面は焼け野原だ。焼け死んでしまったのか。どこを探せばよいのか、暗澹とした気持ちで座り込んでしまった。朝になって手分けしてあちこち探していたら井戸の底から「オーイ助けてくれ」と若い男の声が聞こえる。覗きこむと井戸の底の鉄管につかまっている青年がいた。一晩中いたらしい。そこで皆で協力して焼け残りの木を繋ぎ助けたが、よくもまあこんな所に

いたものと感心した。青年は皆に感謝して握手して別れたが今はどうしているか。近所を見て回ると防空壕の中に避難していたが、焼夷弾の直撃を受けた一家 6 人の黒焦げの死体が掘り出されていたり、焼け跡のあちこちに死体を完全に焼くべく木を井桁に組んで焼いていたりする姿があちこち見られ嫌な臭いが立ち込めていた。そして行方不明の妹二人の死体を探しに行こうと思っていたら、突然顔を真っ黒にした妹二人が帰ってきたではないか。「よかった、よかった」と皆で手を取り合って抱き合ったものだ。聞く所によると、火のないところを探して一晩中、逃げ回り何とか助かったとのことだが奇跡に近い。私はこのような大空襲の時でもカメラは放さなかった。我が家の焼け跡や新宿まで続く焼け野が原を撮ったが、空しいものになった。我が家は全くの丸焼けで何一つ残ってはいない。きれいさっぱり灰になり涙もすっかり枯れて出なくなった。昔の小学校はじめ記憶にある建物は全部灰燼に帰して、思い出ともに無に等しい風景になってしまった。幸い荷物の一部を田舎に疎開しておいたのである程度助かったが、それから何年も不便な生活が始まった。

終戦の勅語のラジオは駅で聞いた。12 時前に着いた電車のお客約 50 人を全員駅前広場に案内して、ラジオを囲んで聞き入った。この前日、明日は天皇陛下の重大放送があるので必ずラジオを聞くよう繰り返し放送していたが、いろいろな噂が流れた。本土決戦で最後まで闘うとか、いや終戦になるとか流れたが、雑音の多い放送の結果は終戦でホッとした気分とになるが、負けたことがない神国日本がついに降伏して、敗戦になったと言う悲しい複雑な気持ちになった。しかし、国鉄は空襲で駅や車庫が爆撃されようと、走行中の電車が銃撃されようと、一日も休むことなく走り続けたものだ。当時の中央線の電車は 6 両編成(3 両で運転したこともあるが)で、運休はしないで頑張り通したものだ。あのころはまだ 18 歳だった。あれからすでに 64 年、長い人生の間にこんな劇的な経験をする人は我々ぐらいのものだろう。その経験をふまえて健康でいることに感謝したい。

私の青春時代は戦争そのものだった。欲しい洋服や靴や靴下などの身の回りの物は替えず、食べ物はろくな物がなく、まして兄弟が多い私は食料の調達に買い出しを迫られ、警察の摘発もあり、それを逃れるのに、常に苦勞をしたものだ。あの頃、映画は細々とやっていたが、他にろくな娯楽や楽しみもなかった。友達や先輩は軍隊にとられ、そして無言の帰国をするたびに悲しい思いをさせられた。一家の大黒柱や将来のある若い人が戦争で死んでいった。戦争は絶対反対だ。軍事力に訴えることなく話し合いですべて解決すべきだ。(戦時下の生活と空襲体験記)

